

第293図 SD160出土遺物(6) (1/8)

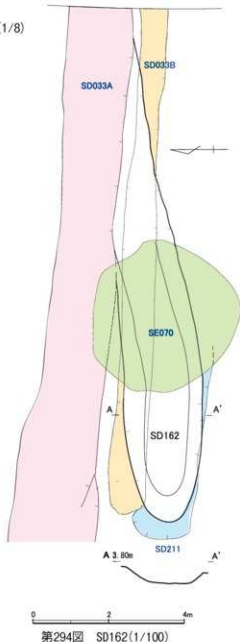
SD162 (第294図)

調査区のはほぼ中央東側で確認された東西方向に延びる溝である。今回の調査区で確認された東西方向に延びる溝のほとんどは、東側に向かって6度ほど南に斜行するが、このSD162のみは逆に8度ほど北に斜行する。しかし、西側の終点については、他の溝と同じくSD160の手前で終わっている。SD162は、SD033B、SD211を切って、SD033A、SE070に切られている。特にSD033Aによって多くを壊されており、全形は今ひとつはっきりしなかった。

出土遺物は、第295図2316から第297図2353である。2316から2325は龍泉齋青磁で、2316は口縁部が小さく外反する碗で、内外面とも無文である。2317は線刻で蓮弁が描かれる碗、2318は残存部では無文の碗である。2319は腰折れの皿。2320は鈎縁の盤、2321から2324は香炉である。2321は帖花で花文が描かれ、口縁部が外側に厚くなる香炉。2322は外面に突帯を廻らせ、如意形の足を付ける樽形の香炉である。2323は3足を付ける小型の香炉、2324はSE070や包含層で出土している意絵を露胎にする香炉(112、268、269、559)の脚部である。僅かに露胎部

青磁

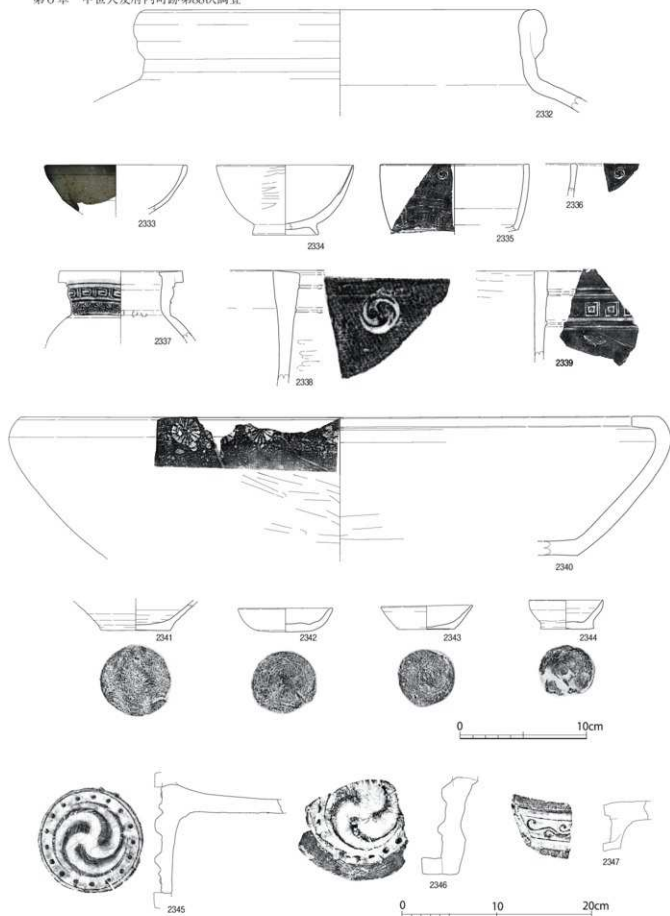
意絵香炉



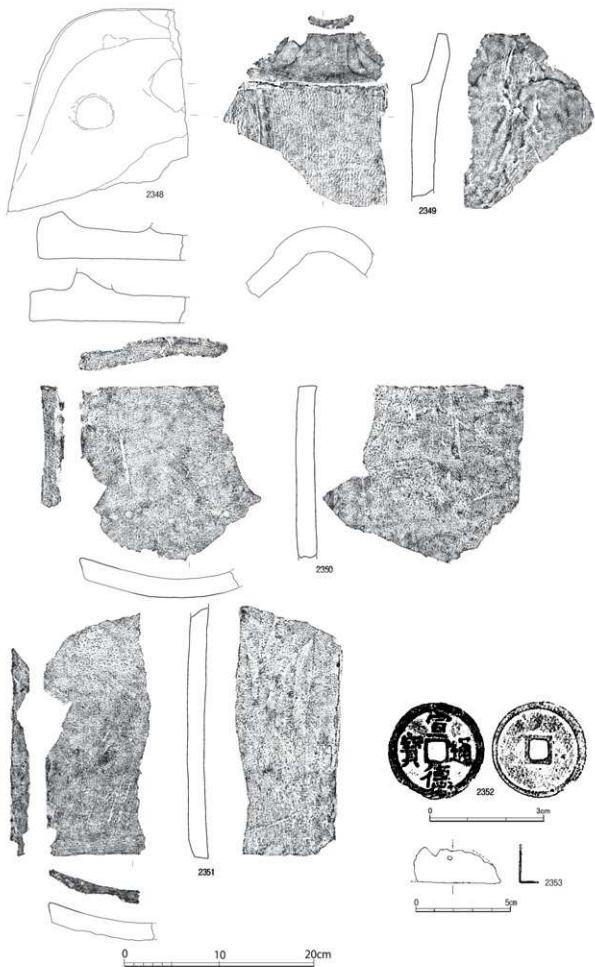
第294図 SD162(1/100)



第295図 SD162出土遺物(1)(1/3)



第296図 SD162出土遺物(2) (1/3, 1/4)



第297図 SD162出土遺物(3) (1/1, 1/2, 1/4)

が見え、窓と足の間の窪ませた文様帯（印花による唐草）がわかる。足は板状の如意形になるはずである（第412図参照）。2325は瓶の耳の部分と思われる。瓶であろうか。2326は五彩である。色がかなり落ちかかっている。

瀬戸美濃系 2327は瀬戸美濃系の皿、2328は唐津焼皿である。この2327と2328はともに包含層出土破片と接合しており、さらに2327はSD033A出土破片とも接合しているため、この両者は混入品と見て良い。

備前焼 2329から2332は備前焼である。2329は乗岡福年中世5期のものである。2332も同時期の甕である。

瓦質土器 2333から2340は瓦質土器である。2333と2334は碗、2335と2336は香炉、2337は華瓶、2338と2339は深鉢、2340は浅鉢である。

大内系 2341から2344は土師質土器で、2341は大内系土器である。他もいずれも糸切り底である。

瓦 2345から2351は瓦である。2345と2346は大きな巴文に珠文が17個廻るA類。2347は中心飾りが四菱になるa類。2348は鬼瓦の板である。2349は雁振瓦である。2350と2351は平瓦。

2352は「宣徳通寶」、2353は銅製品で、L字状に曲がる角部である。

以上の遺物からSD162の時期を探ると、2327と2328は混入品の可能性が高いので除くとすると、16世紀に下るものは無く15世紀後半代のものが主体であり、時期は15世紀後半とすることができる。

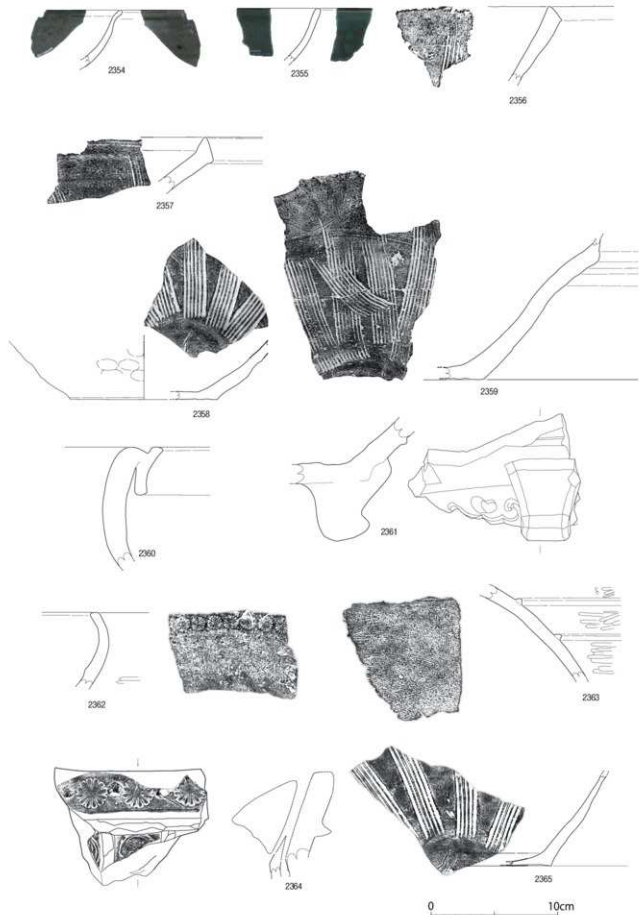
SD173（第279図）

調査区の東側のラインと平行に南北方向に延びる溝である。SD156に切れ、重なるように延びるが、SD156と同様東西方向の溝SD174に切れ、SE070の井戸の北側では確認されない。このあたりで溝が終わっていると判断できる。南側は、調査区の南側まで続いており、隣接する第11次調査区（第11次SD043）まで延びている。南北方向に延びる他の溝を見ると、ほぼ座標軸に平行に延びているが、このSD173は北を頭にした時に、若干東側に振れている（約4度）。この傾きにほぼ平行するものは、調査区北東隅部で確認された柱穴列で、この柱穴列も南側の第11次調査区でも確認されている。すなわち、SD173はこの柱穴列と同時期に機能した遺構群と考えることが出来る。調査区内では全長19.7m確認され、幅は復元約1.0mで深さは約0.5mである。

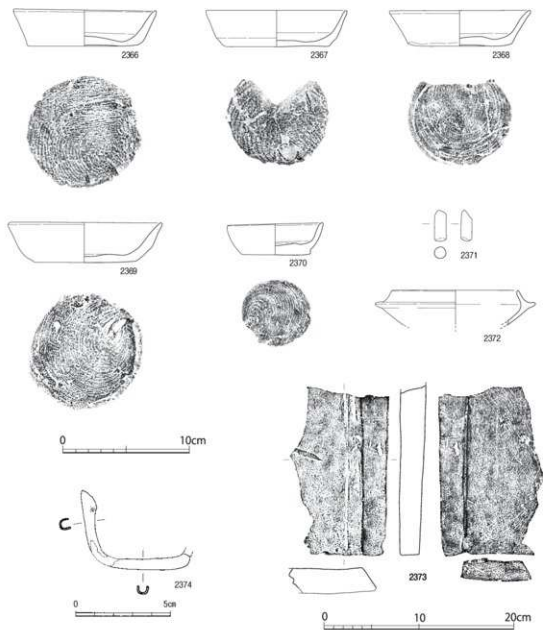
青磁 出土遺物は第298図2354から第299図2374である。2354と2355は青磁碗で、2354は口縁端部が小さく外反して開くもの。2355は直口するものである。2356から2359は備前焼摺鉢で、乗岡福年の中世3期から4期のものである。2360は常滑焼甕である。2361から2365は瓦質土器で、2361は雲板状の飾りを伴う風炉の猫足、2362は浅鉢、2363は風炉の胴部、2364は風炉、2365は摺鉢である。

土師質土器 2366から2370は底部糸切りの土師質土器。坏の口径は10.9から12.3cmである。2373は罫、2371は素焼きの様状の土鐘、2372は古墳時代後期の須恵器坏である。2374は青銅製品である。

SD173の時期は15世紀の前半代であるが、土師質土器の小皿がやや深めになっており、前半代でも中頃に近い年代が与えられる。



第298図 SD173出土遺物(1) (1/3)



第299図 SD173出土遺物(2) (1/2, 1/3, 1/4)

SD181 (第300図)

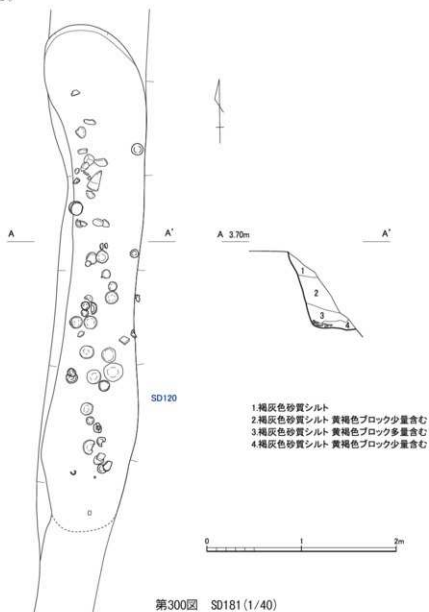
SD120掘削中に確認された遺構である。すなわち、SD120の掘削に伴って大部分は消失したと考えられるが、かろうじて長さ5.2mにわたって、SD120の壁として残っていた。場所は、SD120の北側調査区端から南側に4mの地点である。

瀬戸美濃系

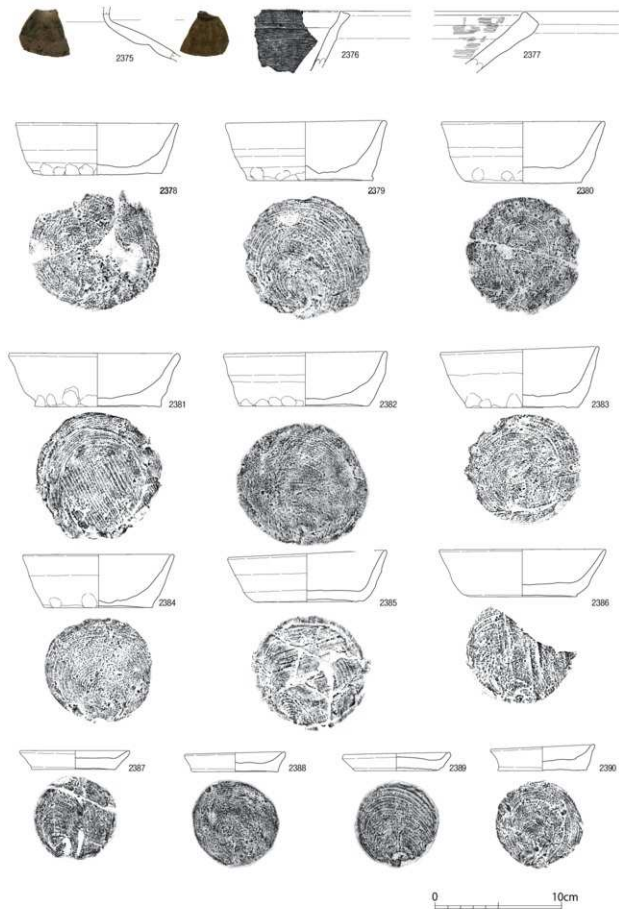
出土遺物は第301図2375から第302図2395である。2375は瀬戸美濃系の壺または瓶子の肩部分である。2376と2377は瓦質土器の鍋、鉢である。2378から2393は土師質土器で、すべて糸切り底の坏と小皿。坏の口径は11.9cmから14.0cmである。坏には2種類あって、一つは体部下端の底部との境部分に指頭圧痕を明瞭に残すもので、断面の外側が急角度で立ち上がるのに対し、内側は緩やかに立ち上がるため、底部付近が断面三角形を呈する。体部中央で稜を持つのも特徴である。もう一つは、比較的口縁部が開きながら立ち上がり、断面形状は内側と外側が同じ形状を呈するものである。2387から2393は小皿である。口径は6.8cmから8.6cmである。全て糸切り底で、やや深めのものと浅めのものがある。2395は面戸瓦である。2394はフィゴの羽口である。

フィゴの羽口

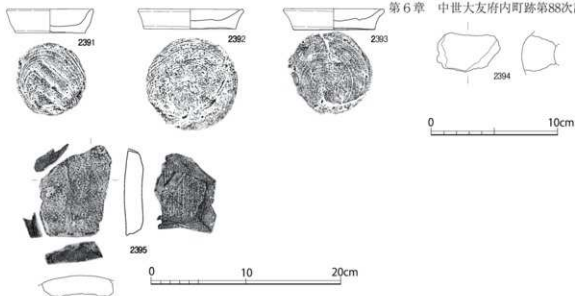
これらの遺物は14世紀後半代に位置づけられる。称名寺創建期に近い時代の遺構とすることができる。



第6章 中世大友府内町跡第88次調査



第301図 S0181出土遺物(1) (1/3)



第302図 SD181出土遺物(2) (1/3, 1/4)

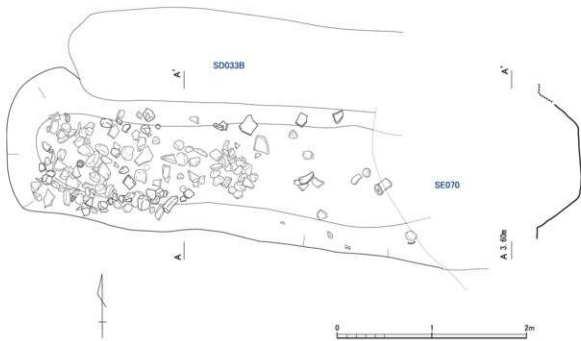
SD211 (第303図)

調査区中央やや南寄り、SD162に大部分を壊されている東西に延びる溝である。調査当時は土坑か溝か判断がつかなかったが、ここでは溝として扱う。ほぼSD162に重なっており、西側の立ち上がり、南側の壁が確認できるのみである。東側はSE070に切られており、その東側では遺構が確認できなかった。

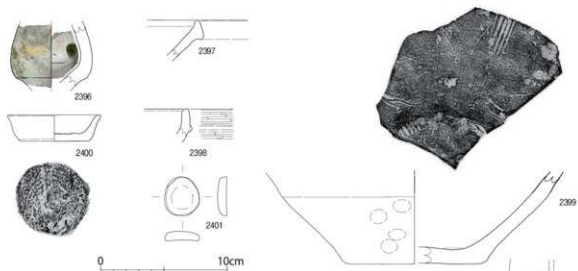
古瀬戸

出土遺物は第304図2396から2401である。2396は古瀬戸の小型の花瓶である。外面は無文。2397は東播系須恵器の鉢、2398は瓦質土器の浅鉢か、2399は瓦質土器擂鉢である。2400は底部糸切りの小皿、2401は滑石製の円盤状製品である。

SD211の時期は、15世紀後半のSD162に切られており、さらに出土遺物はやや時期の古いものも含まれるが、2400の土師質土器は15世紀後葉のものであるので、SD162とさほど変わらない時期の所産と判断される。



第303図 SD211 (1/40)

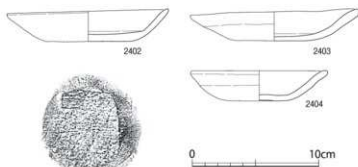


第304図 SD211出土遺物(1/3)

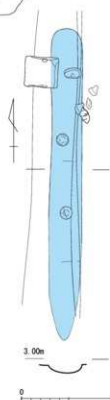
SD224 (第305図)

SD120を掘り下げる途中で確認された遺構である。確認された位置はSD120の中央やや北寄りの東壁部分である。SD224はSD120によって大部分削られていると考えられ、残存していたのは幅0.32cm、深さ10cm程度に過ぎず、長さは3.28mであった。

出土遺物は第306図2402から2404の京都系土師器で、器壁が薄く16世紀前半から中頃のものである。



第306図 SD224出土遺物(1/3)



第305図 SD224(1/40)

SD225 (第307図)

調査区中央を南北方向にはほぼ直線的に延びる溝である。北側は、ほぼ中央あたりで西側に折れ、20.0m延びて終わる。南側は第11次調査区の南端あたりまで確認されている。幅は1.3~1.6m、深さは0.48mである。

出土遺物は第308図2405から第309図2419である。2405と2406は龍泉窯青磁碗である。2405は外面に細線による蓮弁文、見込みに「富貴長命」の4文字を印花する。2406も同じく線描きの蓮弁文が外面にある。2407は中国産の天目茶碗。2408は青と黄色の釉薬を使う瓶で、不遊環を持つ。2409は漳州窯系の青花碗で、見込みは蛇の目軸刺ぎとなり、中央には絵が描かれる。2410は唐津焼の皿。2411と2412は備前焼の播鉢で、乗岡編年中世5期から6期のもの。2413は須恵器の鉢である。2414から2416は瓦質土器で、2414は淺鉢、2415は風炉の脚部、2416は深鉢である。2417は球形の体部に輪高台を貼り付けた土師質土器碗で、吉備系か。2418は備前焼の破片を利用したメシコ、2419は弥生土器である。

以上の遺物からは、漳州窯青花や唐津焼の存在からSD225の時期は16世紀末以降となるが、このSD225と連続する第11次調査区のSD053ではこの時期の遺物が一切出土しておらず（遺構の時期は16世紀前葉から中頃と判断）、また、SD225の北側で、SD225一体となって延びていた可能性のあるSD060Bが16世紀中頃を想定できることを考えると、このSD225から出土している漳州窯青花や唐津焼については、上面における別遺構の混入品と判断される。そうすれば、他の遺物は16世紀中頃以前で問題なくなる。

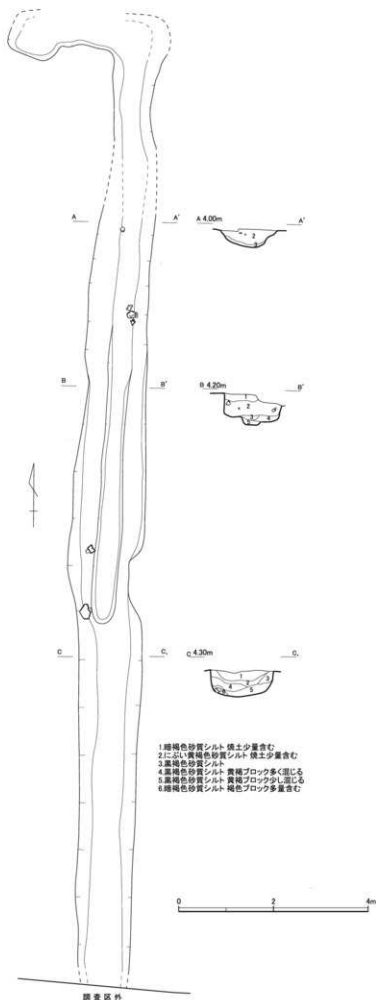
青磁

天目茶碗

漳州窯青花

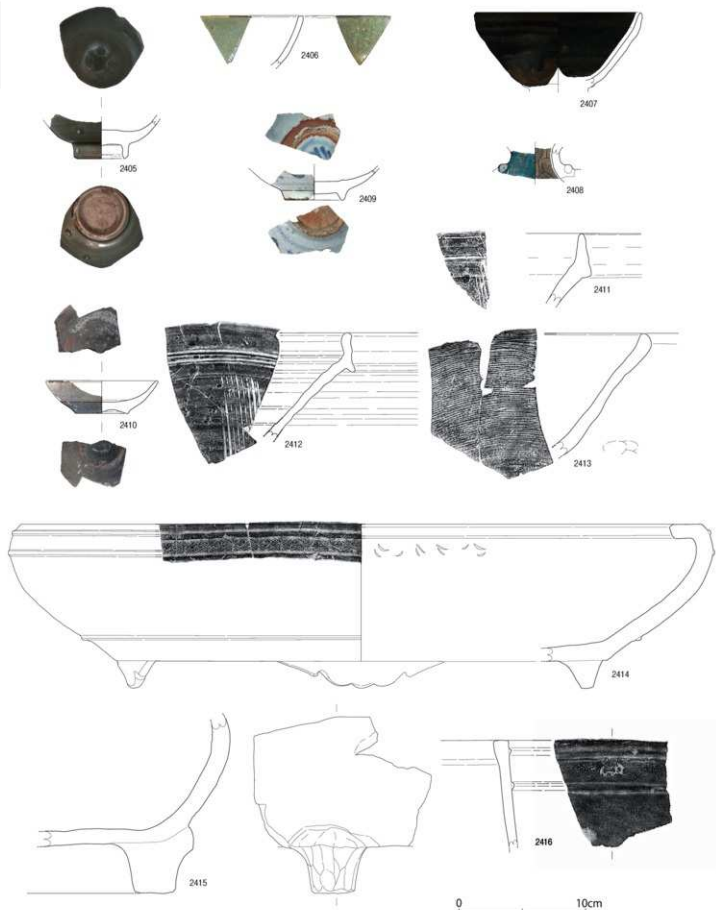
唐津焼

混入品

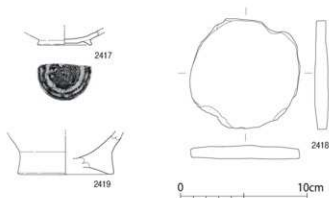


第307図 SD225 (1/80)

第6章 中世大友府内町跡第88次調査



第308図 SD225出土遺物(1) (1/3)



第309図 SD225出土遺物(2) (1/3)

SD439 (第310図)

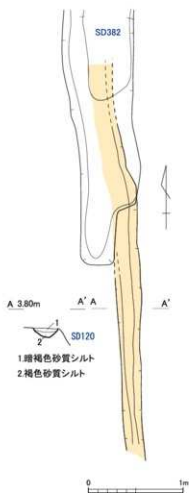
第2南北街路を掘り下げる途中で、SD120の際に沿って確認された溝である。SD382に切られている。長さは3.5m確認された。幅0.25mで深さは約10cmである。

出土遺物は第311図2420の備前焼播鉢である。乗回堀年中世4期のものである。

遺構の時期は、遺物が1点なので決めがたいが、一応播鉢の年代観の15世紀前半代を充てておく。



第311図 SD439出土遺物(1/3)



第310図 SD439(1/40)

(2) 土坑

SK061 (第312図)

調査区の北東部にある、最大長さ18m、最大幅9m、深さ1.2mの不整形の大型土坑である。SD060の2条の溝からは切られている。ほぼ中央に2箇所のコンクリ製基礎があったため、全て掘りきれていないが、ほぼ全形はわかる。しかし、南側は新しい遺構から切られるなどして、形状が明らかでない。ただ、不明確なのは壊されているだけではなく、もともと明確な掘り込みがなかった可能性もある。逆に北東部は明確な掘り込みが確認できる。この北西部は床面も一段深く、遺物も多く含まれている。土層図を見ると、土坑全体が自然堆積状態であり、複数回の掘り直しなどは認められない。遺物は10~20cm大の礫とともに、瓦、陶磁器、土師器などが出土している。

自然堆積

青磁

第313図2421から第347図2621までがSK061出土遺物である。2421から2441までは青磁である。2421と2422は連弁文、2423と2424は口縁部に雷文帯を持つ碗。2425と2426は無文。2427、2428は見込に花文を持つ。2429はやや大型の皿高台部。2433から2435は鈿緑の口折皿で端部を上方に摘み上げる。2436から2438は皿。2437は腰折れで、口縁端部が小さく外反する。2439は器台か。2440は香炉の脚、2441は壺で、貼花で植物を描く。2442は青花皿。B1群と思われる。2443は白磁の碗。2444は陶器で内面に漆が付着している。2445と2446はいずれも中国産の天目茶碗。2447から2449は瀬戸美濃系の陶器。2447は梅瓶、2448は鉢、2449は脚皿である。

青花
白磁
天目碗備前焼
常滑焼
瓦質土器

2450から2466は備前焼である。2450から2452は壺、2453は甕、2454から2466は摺鉢である。2467は常滑焼甕、2468は中国産の甕底部。2469から2504は瓦質土器。2469から2476は火鉢、2477から2489は風炉か。2490から2495は火鉢あるいは風炉の脚部。2496は甕、2497は香炉か。2498は摺鉢、2499から2502は鉢、2503は花瓶の脚部か。2504は鍋の脚部か。2505から2524は土師器。2505は箱形、2506から2512は直線的に大きく開く坏。2511は大内系。2516から2524は小皿で、2512から2515は内面に轆轤目を顕著に残す。2523と2524は極小の坏。胎土は精選されている。2525と2526は耳土器である。2527と2528は燭台。燭台は16世紀代に主体となる6類ではなく、脚部の短い15世紀代と考えられる5類である。2529は土師製の鍋。

大内系
耳土器
燭台

雁振瓦

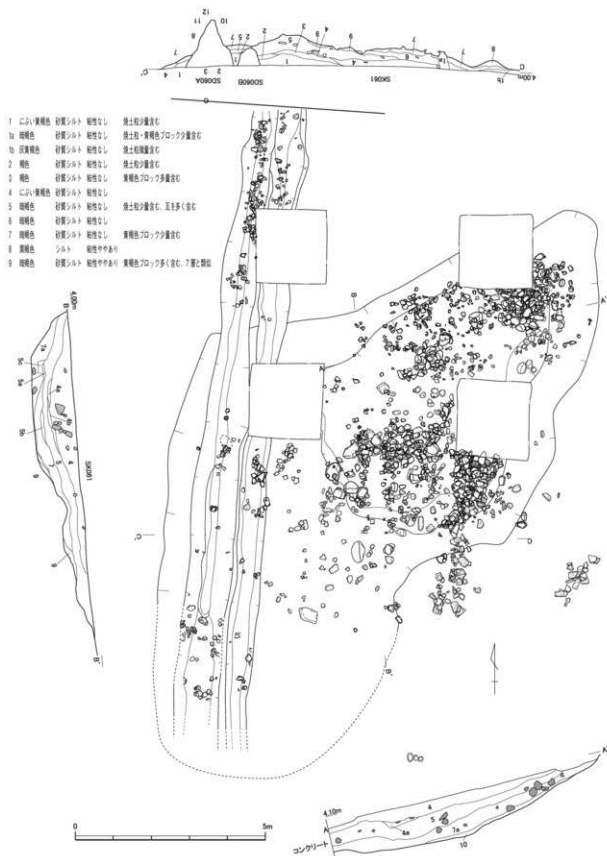
2530から2543は丸瓦、2544から2604は平瓦、2605から2608は伏間瓦(雁振瓦)である。瓦当は破片のみであるが、丸瓦は珠点が17個ある巴の頭が比較的大きく、珠文帯との間に圏線を有しないA類、平瓦は唐草が上向きに3回、下向きに2回転し、中心飾りが変形になるa類に復元できる。丸瓦は内面コピキ痕、外面に縄目叩き痕を残す。吊紐痕は2535のように大きく垂れ下がる。SD120から出土するような九州タイプの吊紐痕や、引っかけ部を持つものは出土していない。平瓦は横幅26cm前後、長さ32から35cmと、SD120出土瓦に比べて大型である。

石臼
五輪塔

2609から2611は砥石、2612と2613は滑石の鍋破片、2614は素焼きの土鉢、2615は石臼の下部受け部破片。2616から2618は鉄釘か。2619は五輪塔の地輪である。2620は「嘉祐通宝」、2621は「熙寧通宝」である。

燭台5類

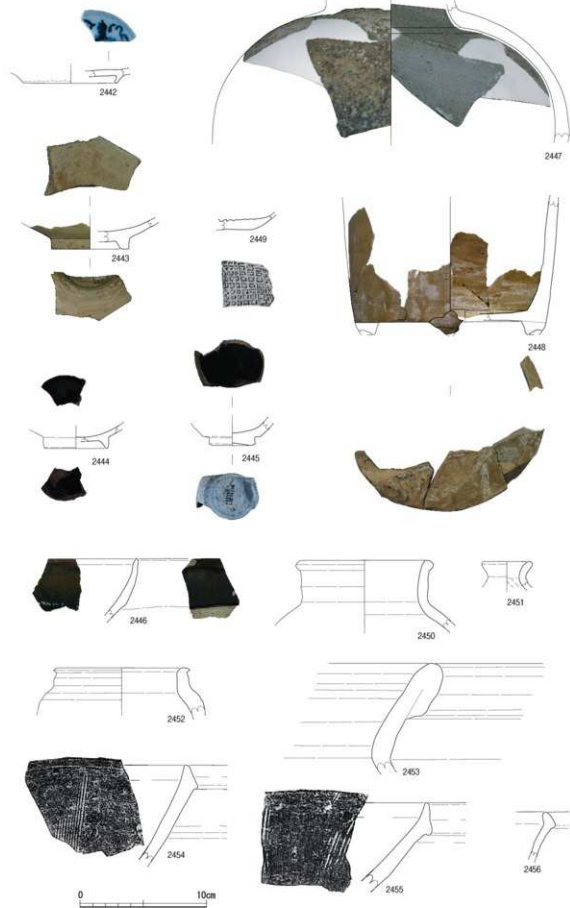
遺構の時期は、青磁を見ると雷文帯を有するC-II類、連弁文のB-III類に鈿緑の皿や腰折れ皿が伴うなど15世紀代の様相を有する。土師器の大内系の坏も15世紀後半代であり、燭台5類の時期も矛盾はない。よってSK061は15世紀後半代を中心として、一部16世紀に入る可能性を指摘しておく。



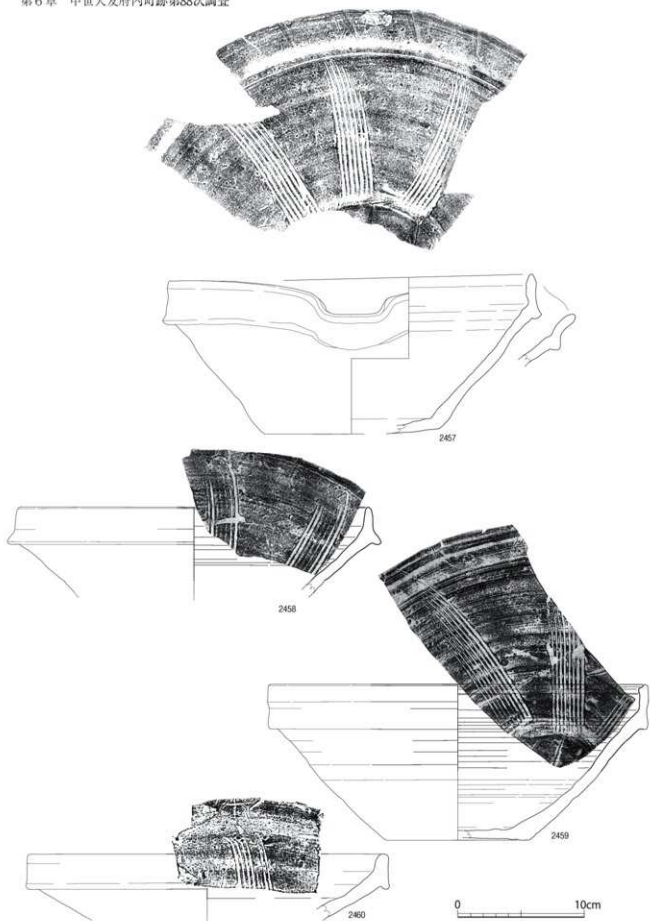
第312図 SK061 (1/100)



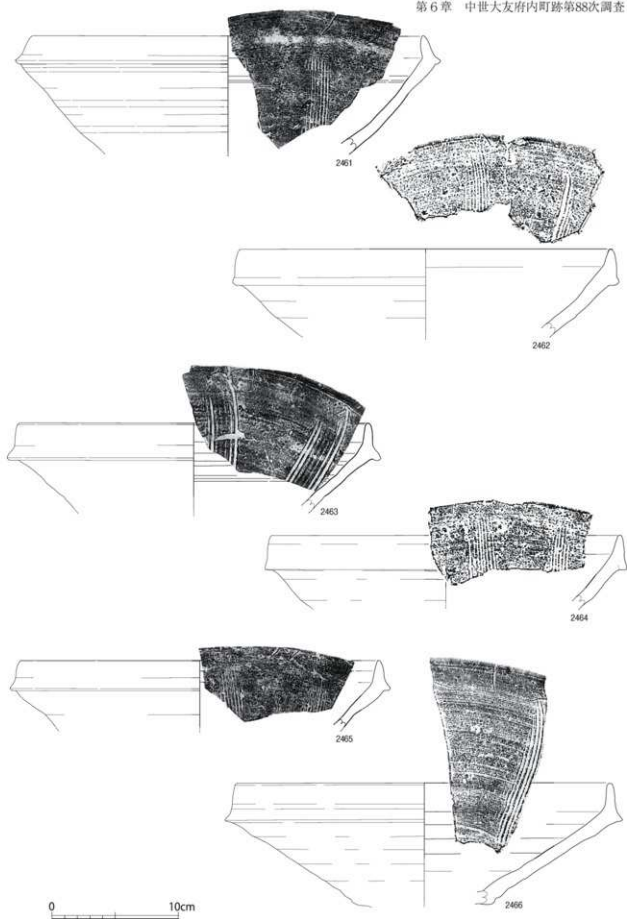
第313図 SK061出土遺物(1) (1/3)



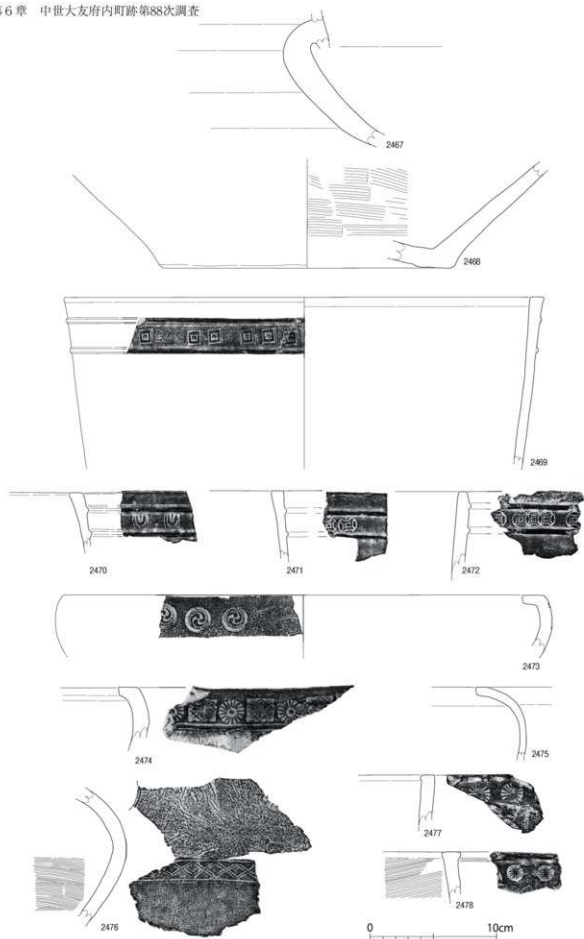
第314図 SK061出土遺物(2) (1/3)



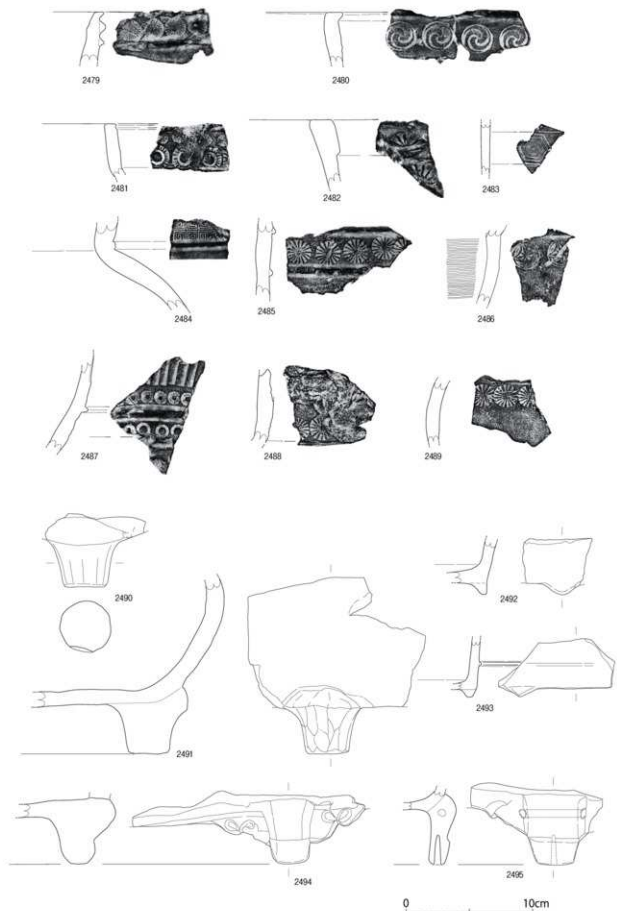
第315図 SK061出土遺物(3) (1/3)



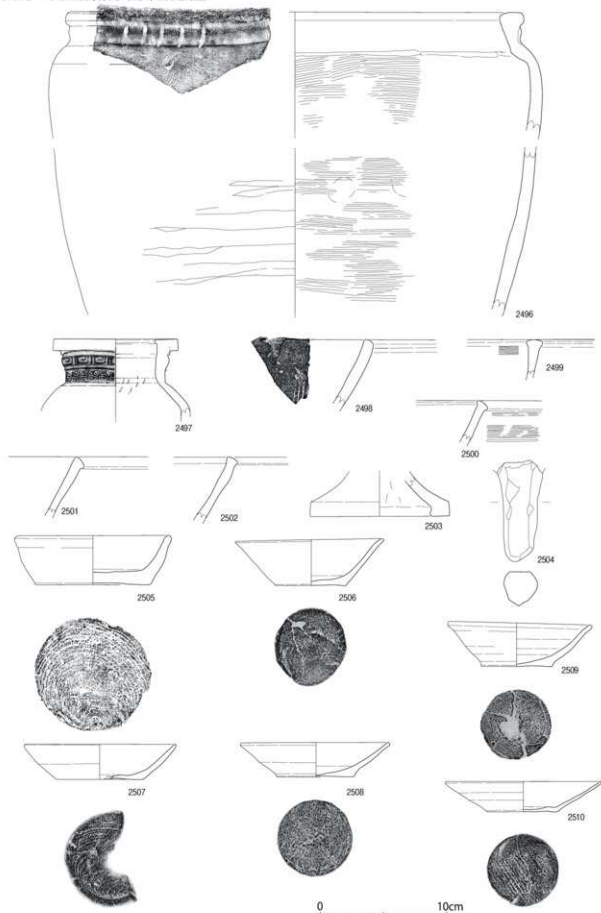
第316図 SK061出土遺物(4) (1/3)



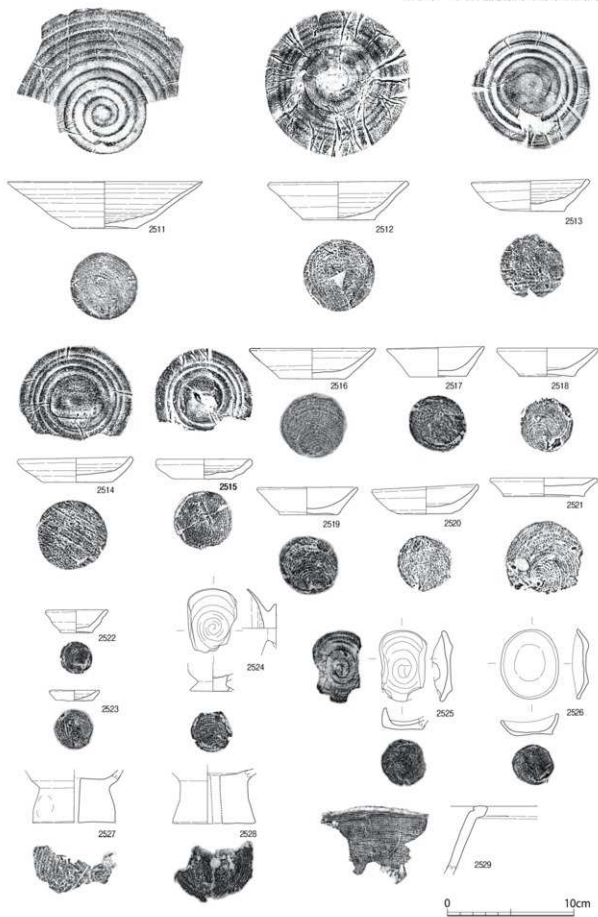
第317図 SK061出土遺物(5)(1/3)



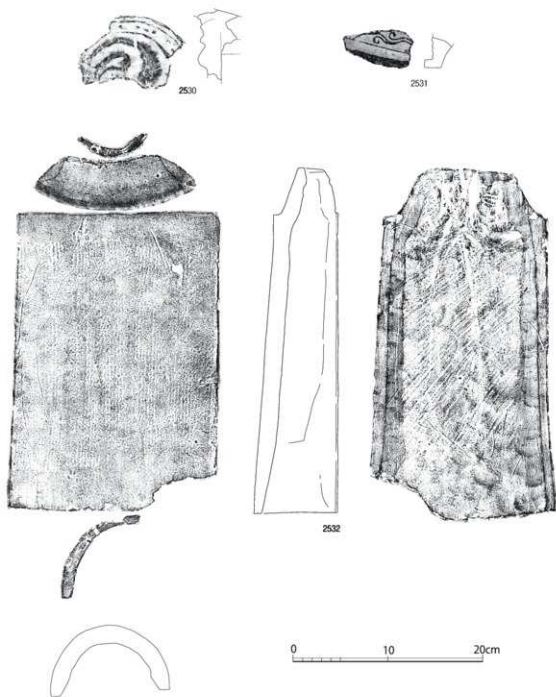
第318図 SK061出土遺物(6) (1/3)



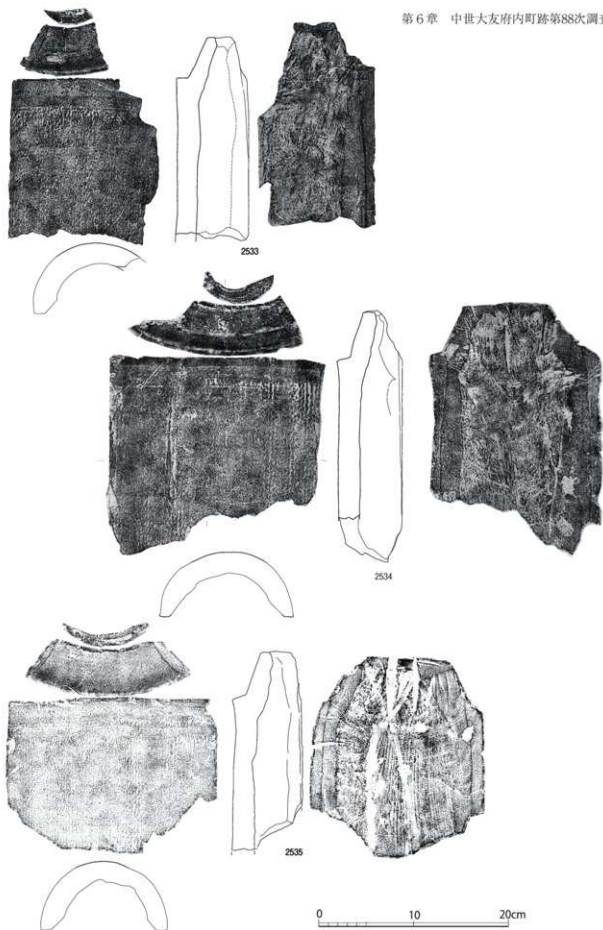
第319図 SK061出土遺物(7) (1/3)



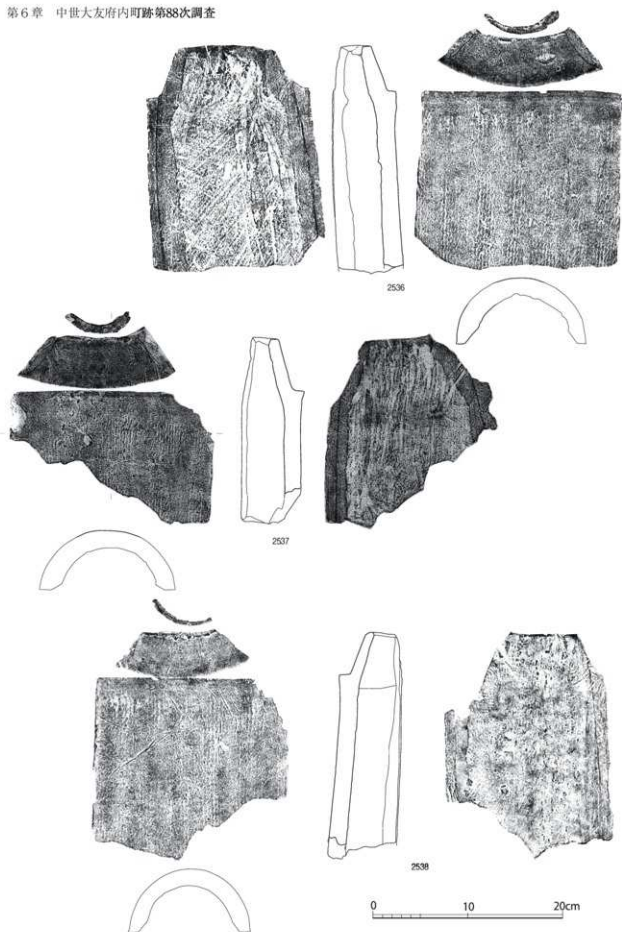
第320図 SK061出土遺物(8)(1/3)



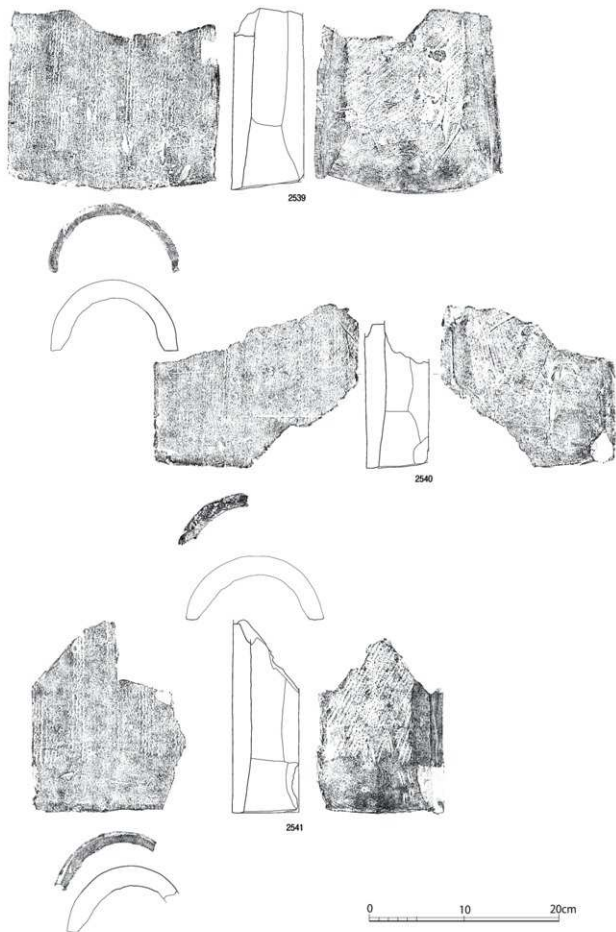
第321図 SK061出土遺物(9)(1/4)



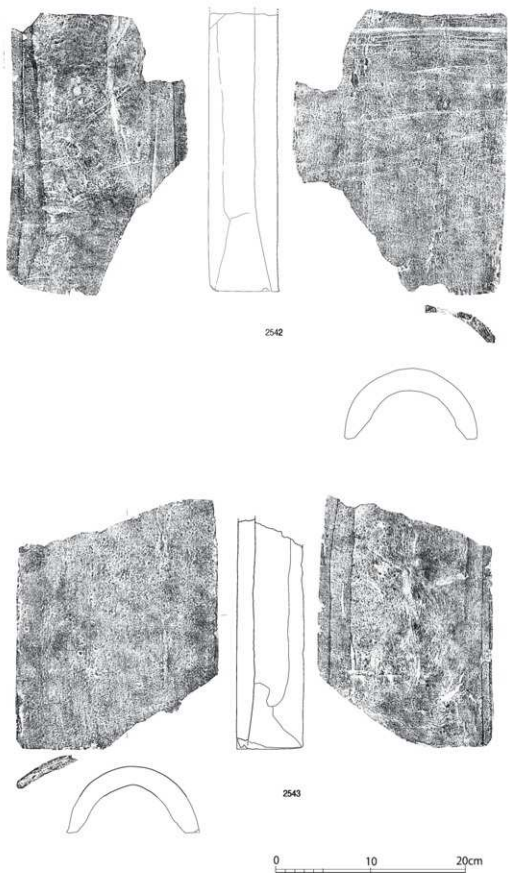
第322図 SK061出土遺物(10)(1/4)



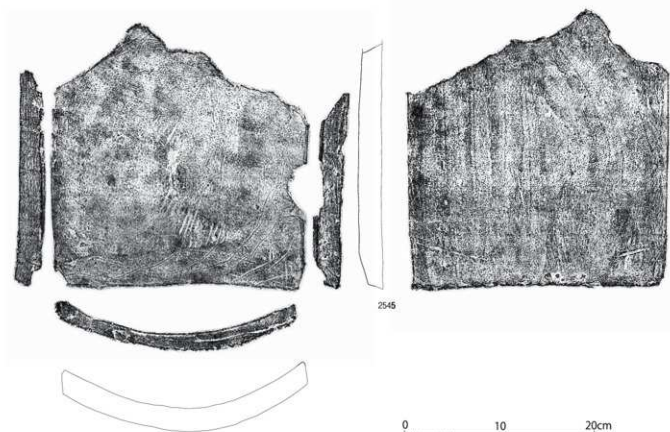
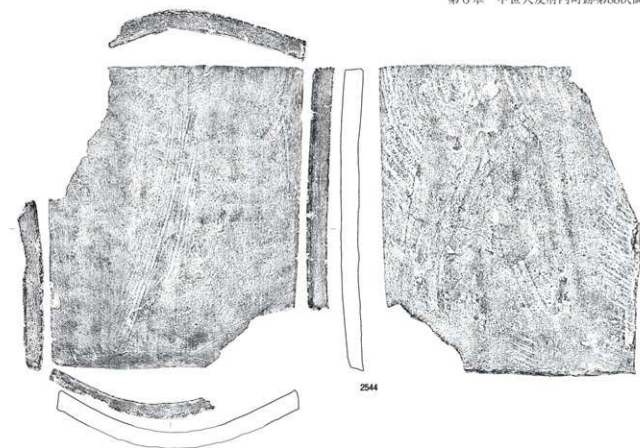
第323図 SK061出土遺物(11)(1/4)



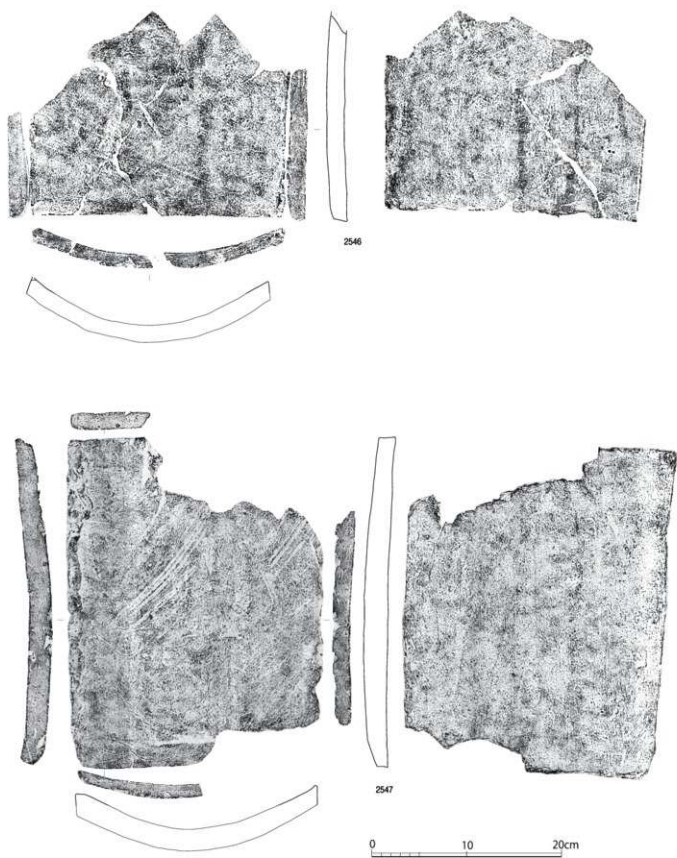
第324図 SK061出土遺物(12) (1/4)



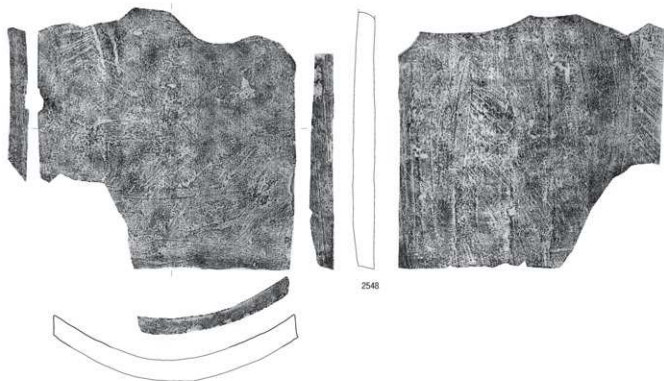
第325図 SK061出土遺物(13) (1/4)



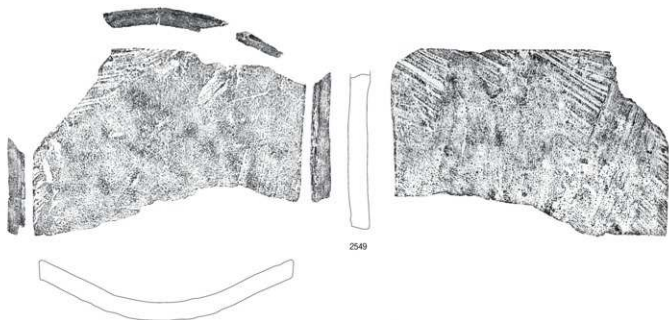
第326図 SK061出土遺物(14) (1/4)



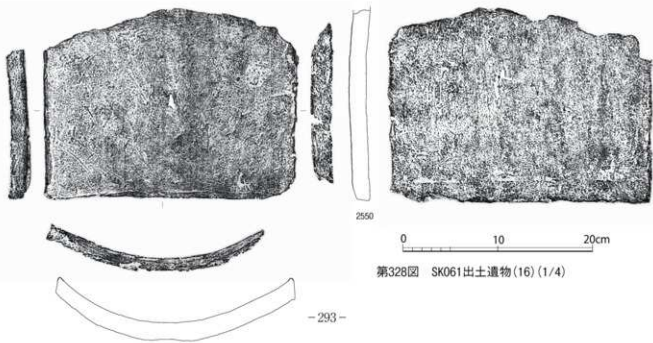
第327図 SK061出土遺物(15)(1/4)



2548



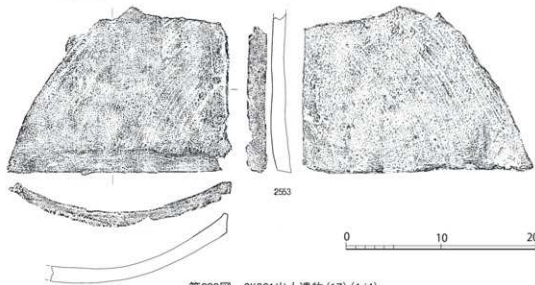
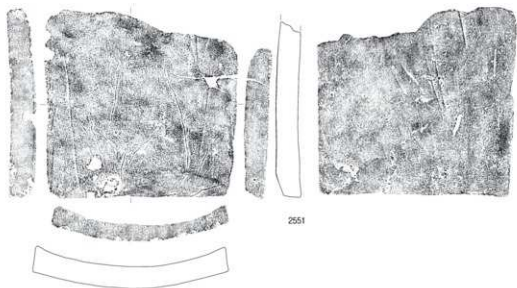
2549



2550

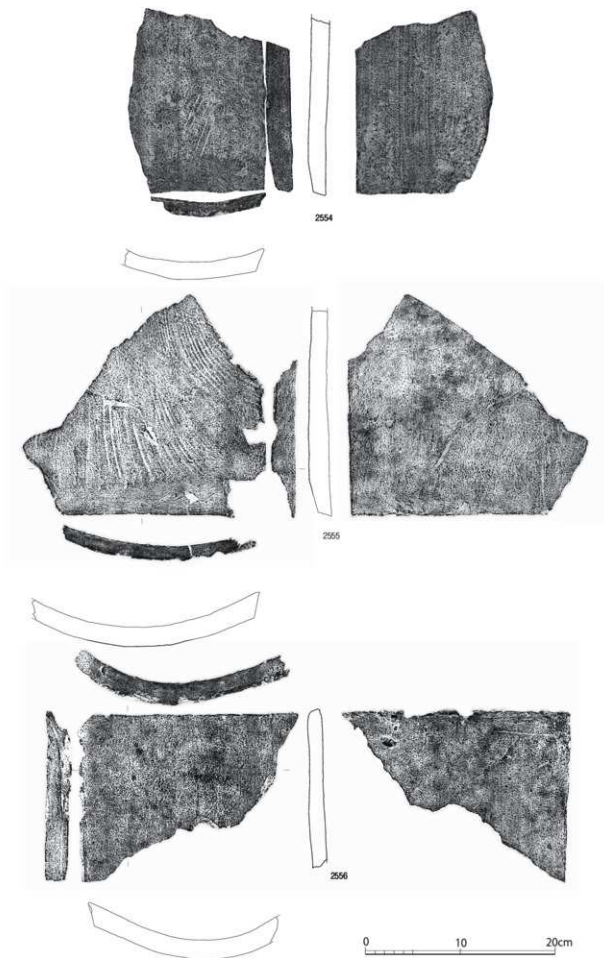
0 10 20cm

第328図 SK061出土遺物(16) (1/4)

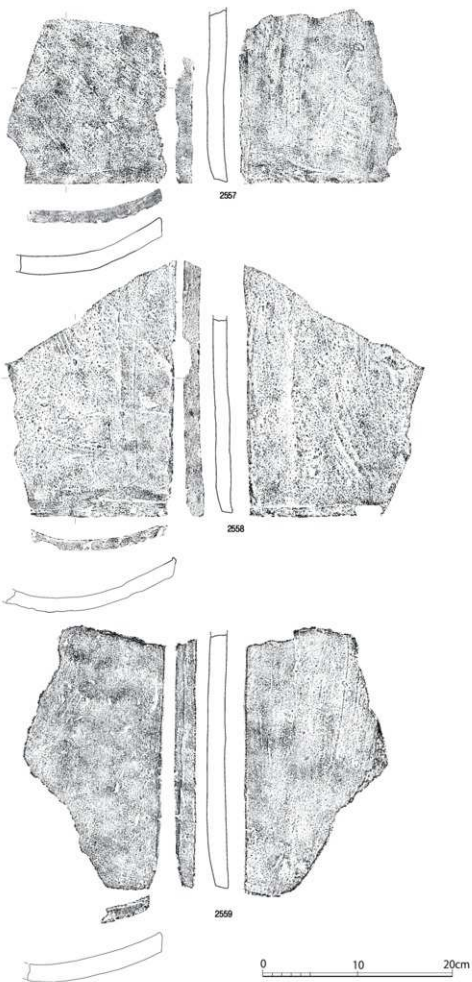


0 10 20cm

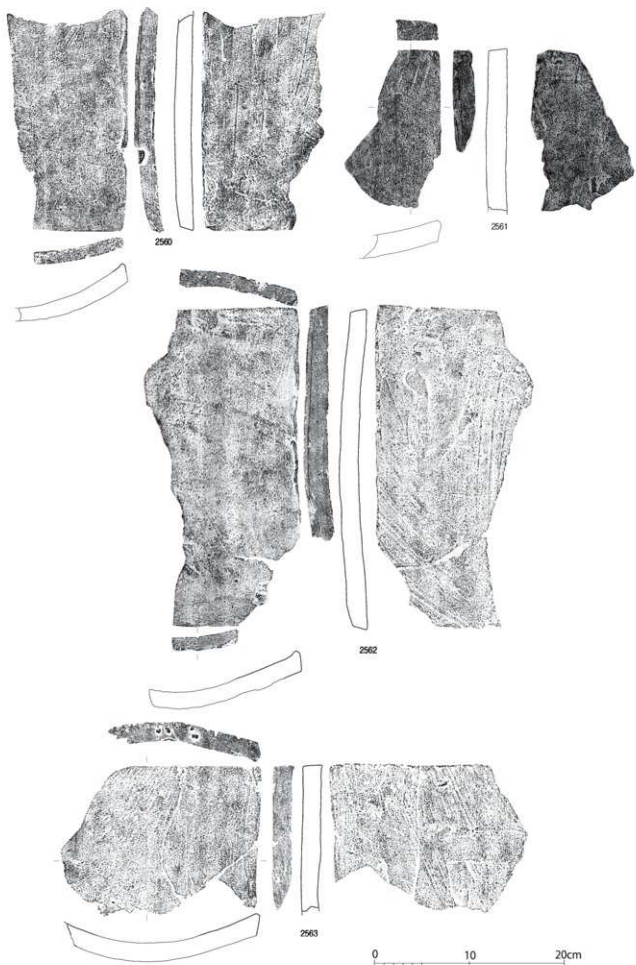
第329図 SK061出土遺物(17)(1/4)



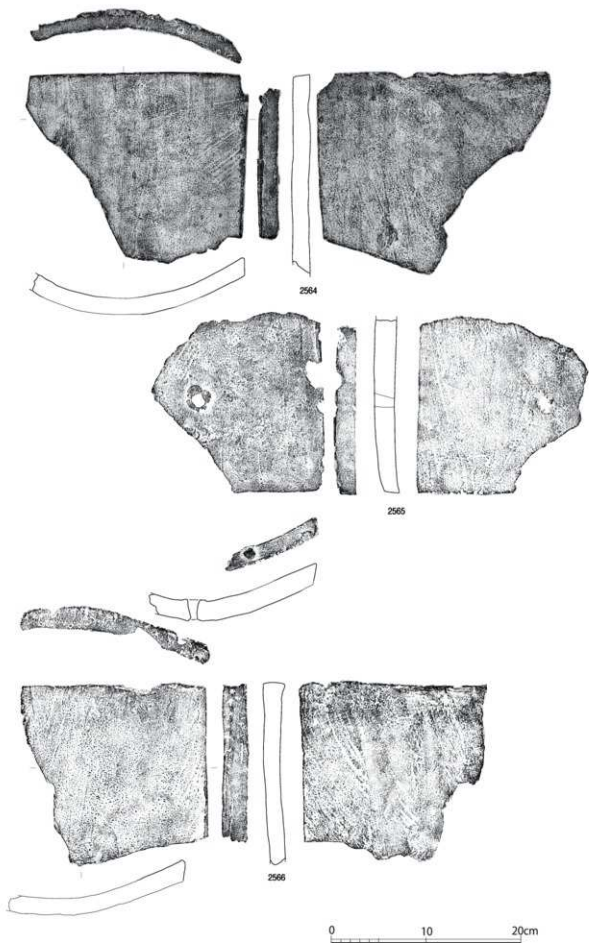
第330図 SK061出土遺物(18)(1/4)



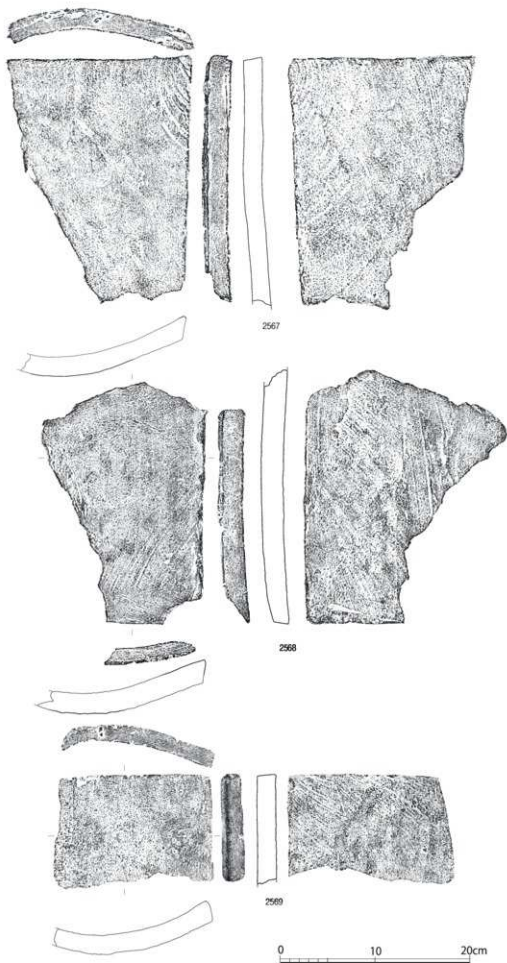
第331図 SK061出土遺物(19) (1/4)



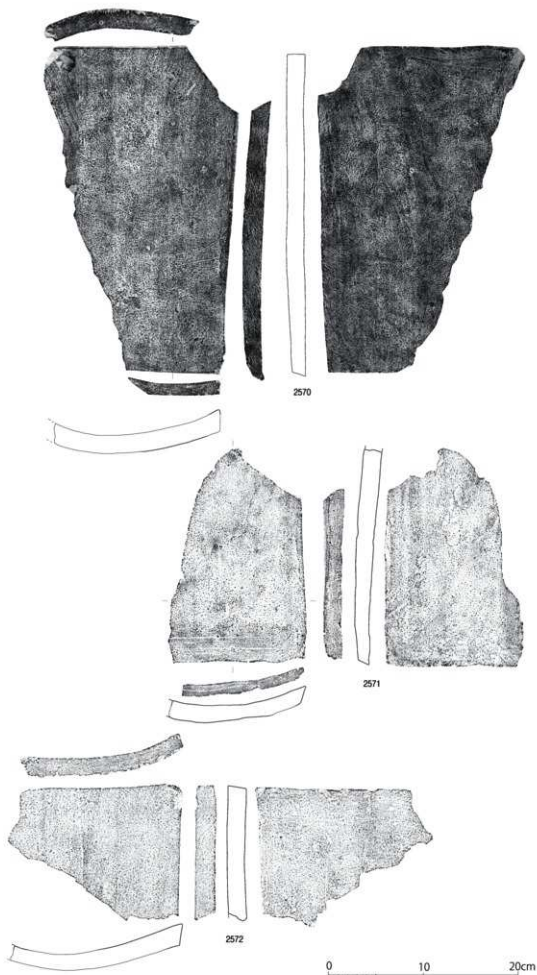
第332図 SK061出土遺物(20) (1/4)



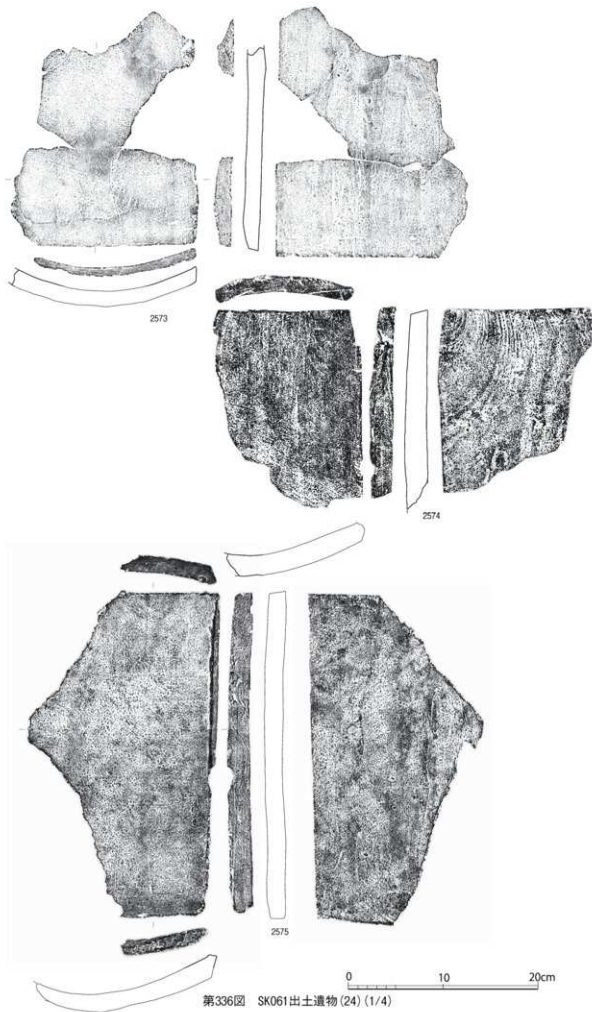
第333図 SK061出土遺物(21)(1/4)



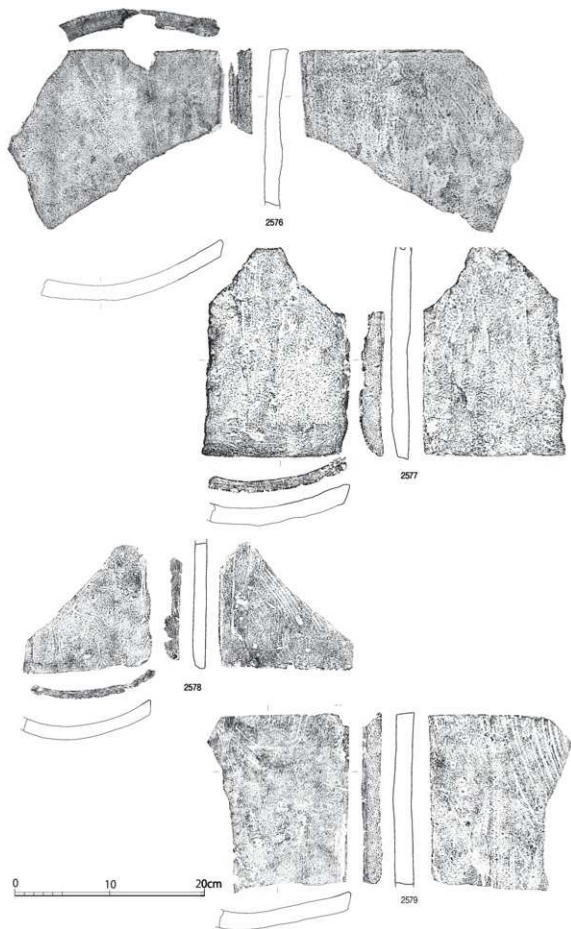
第334図 SK061出土遺物(22) (1/4)



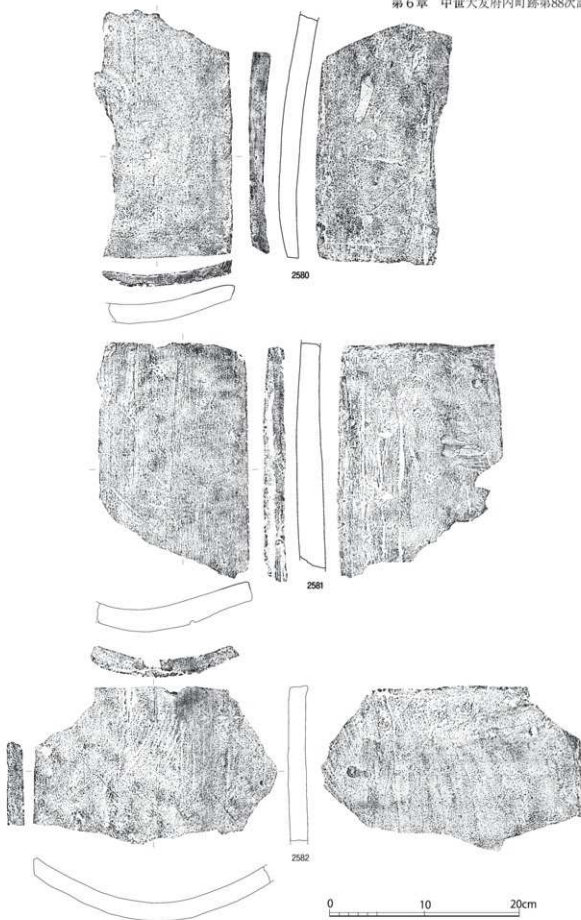
第335図 SK061出土遺物(23) (1/4)



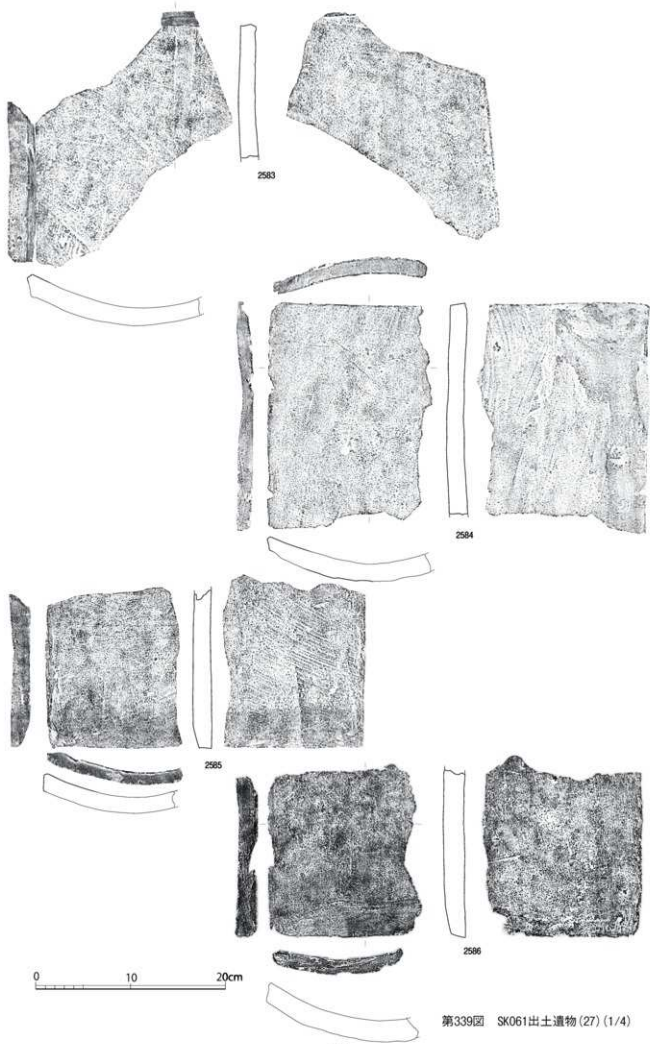
第336図 SK061出土遺物(24)(1/4)



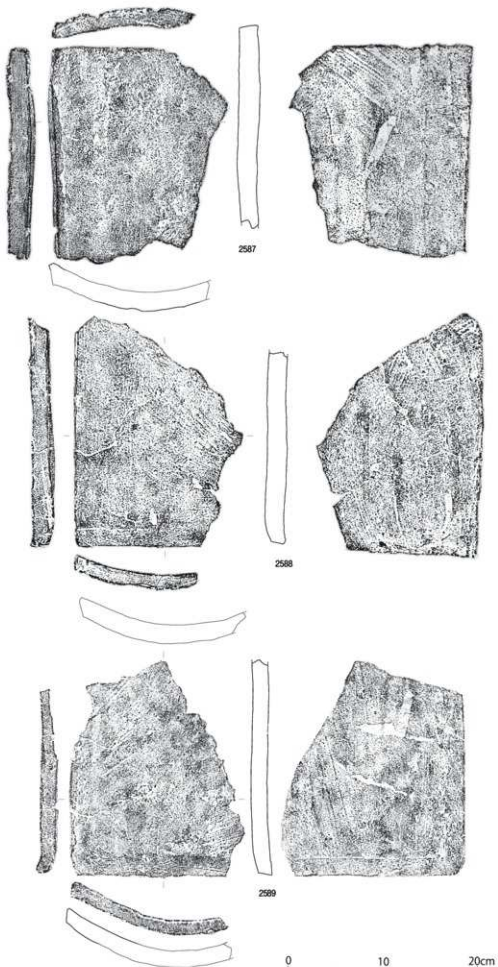
第337図 SK061出土遺物(25) (1/4)



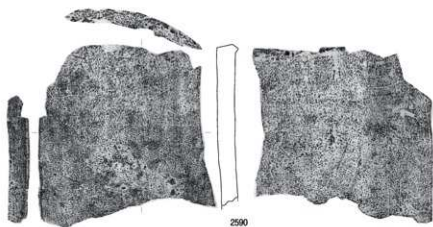
第338図 SK061出土遺物(26) (1/4)



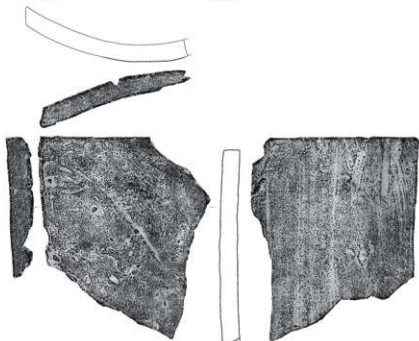
第339図 SK061出土遺物(27)(1/4)



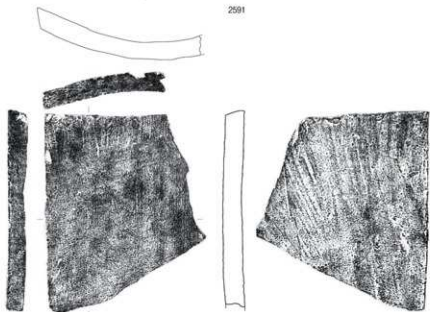
第340図 SK061出土遺物(28)(1/4)



290



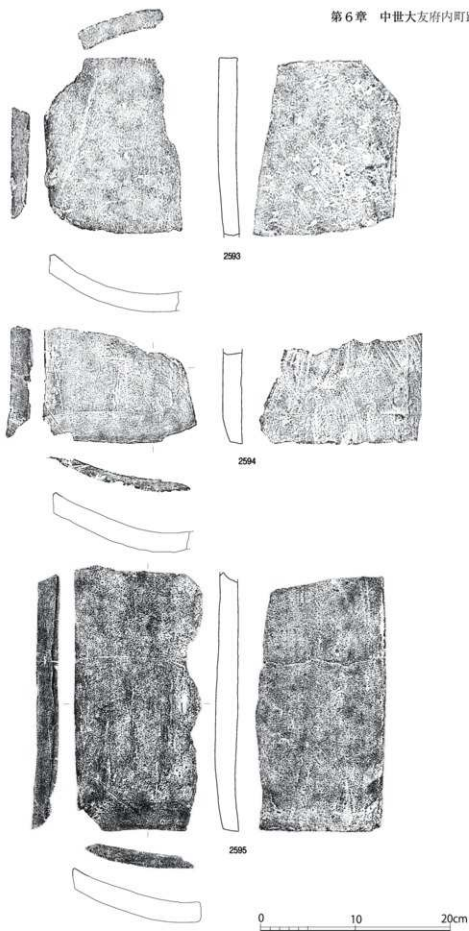
291



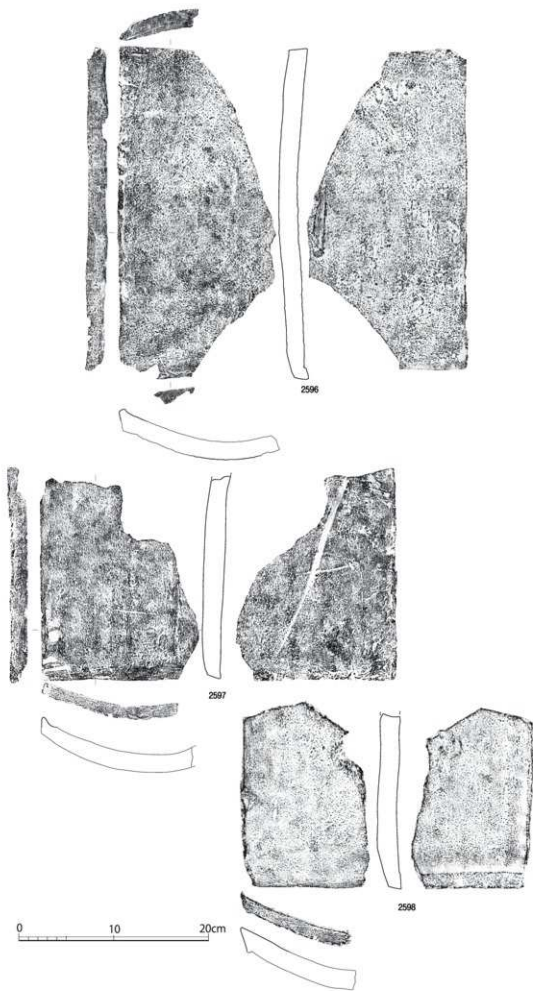
292

0 10 20cm

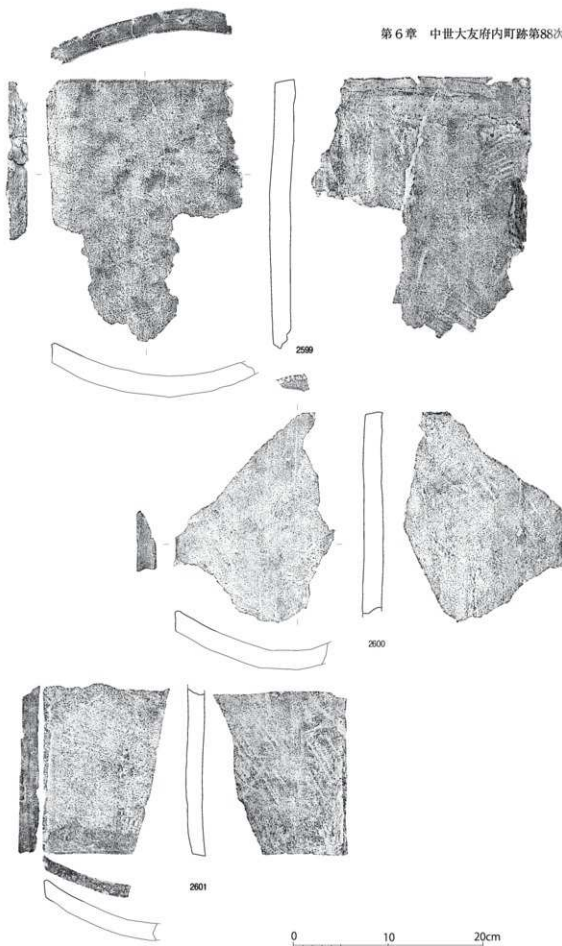
第341図 SK061出土遺物(29) (1/4)



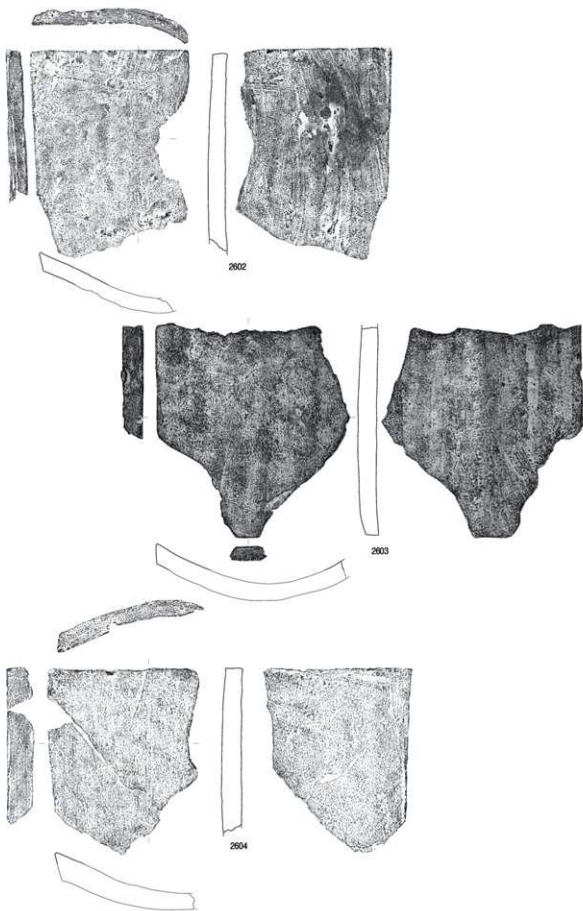
第342図 SK061出土遺物(30) (1/4)



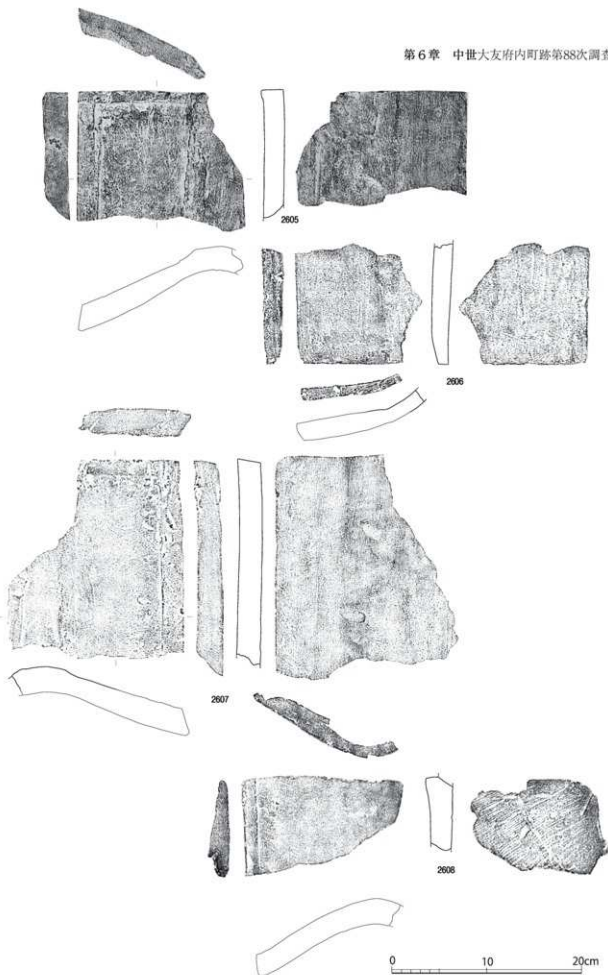
第343図 SK061出土遺物(31)(1/4)



第344図 SK061出土遺物(32) (1/4)

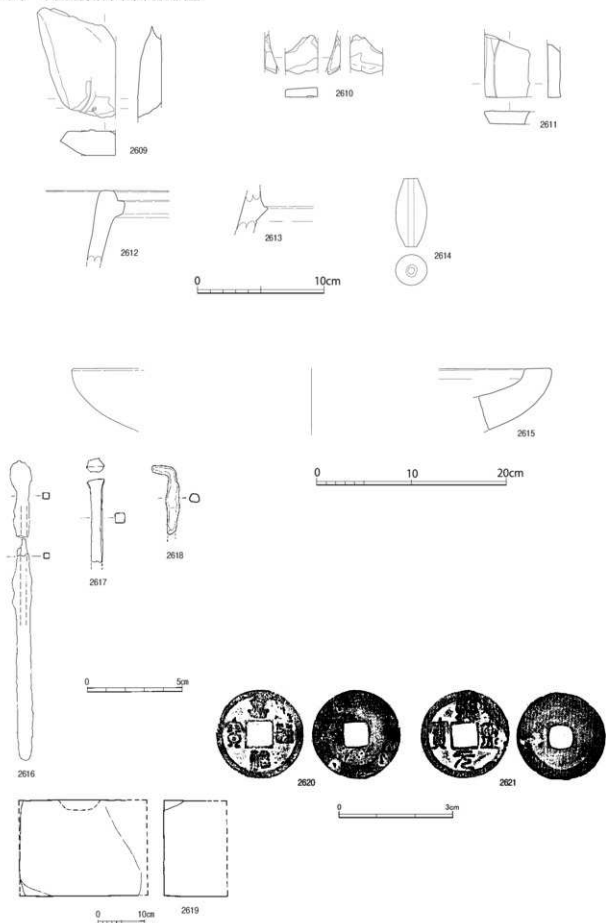


第345図 SK061出土遺物(33)(1/4)



第346図 SK061出土遺物(34) (1/4)

第6章 中世大友府内町跡第88次調査



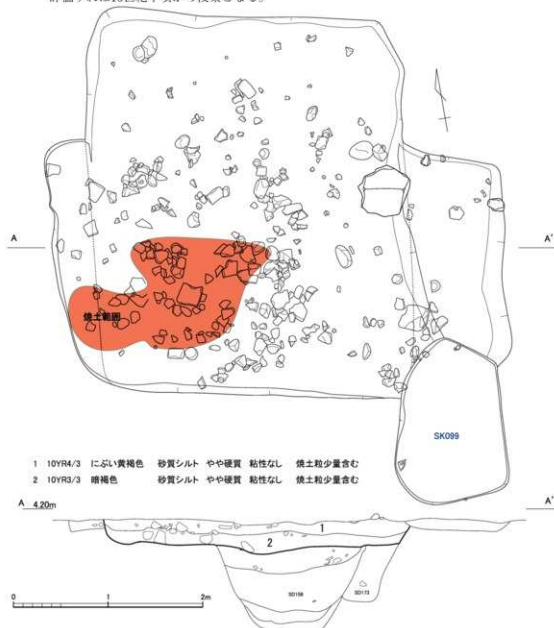
第347図 SK061出土遺物(35) (1/1, 1/2, 1/3, 1/4, 1/8)

SK101 (第348図)

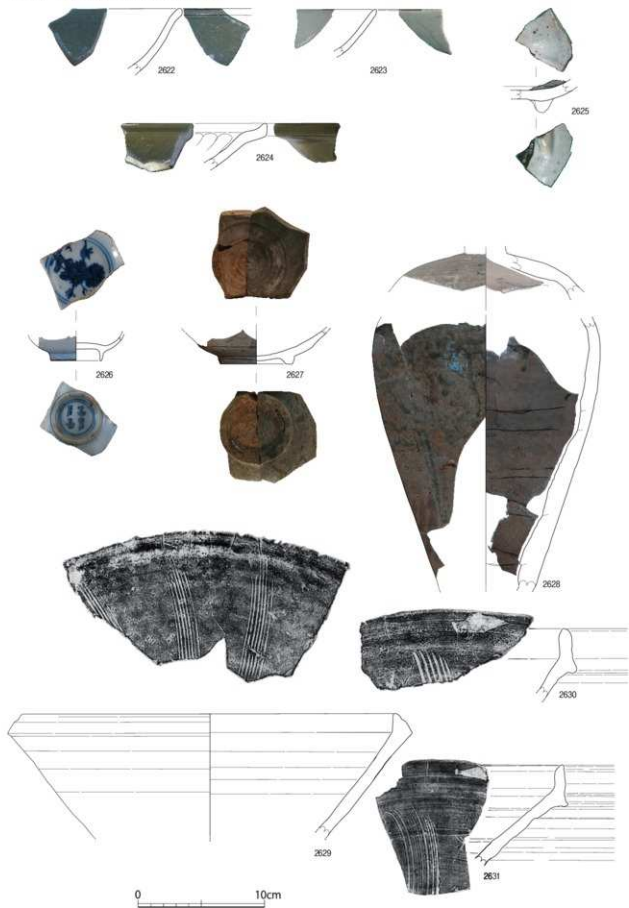
調査区南東寄りで確認された方形の大型土坑。南北3.96m、東西3.32mで、深さは0.24mである。図からわかるように、SD156とSD173、SK144を切って、SD143から切られている。遺構の南西側4分の1ほどの上面には焼土 (SX095) が広がっていた。ただし、このSX095は島津氏侵攻時 (天正14年) の火災処理に伴うものであり、SK101との直接的な関係はないと考える。また、遺物は際とともに出土しているが、この遺構の性格を示すような出土状態、出土遺物はないので、遺構の性格は不詳である。

出土遺物は第349図2622から第353図2651である。2622から2624は青磁。2622と2623は無文の碗。2624は内面を花卉状に窪ませる盤。2625は白磁で碗か。2626は景德鎮青花で、内面には菊花、底部には「富貴佳器」の銘がある。2627は朝鮮王朝産の陶器碗で、薄く目跡が残る。2628は瀬戸美濃系の梅瓶で、SK131出土の破片と接合し、SE070ものとも同一個体か。2629から2631は備前焼拵鉢。2632から2638は瓦質土器で、2632は火鉢、2633と2634、2636は風炉、2635は器種不明、2638は香炉である。2639から2641は土師器坏と小皿。2642は素焼きの土鈴か。2643から2648は瓦。2649と2650は板状の木製品。2651は「熙寧通宝」である。

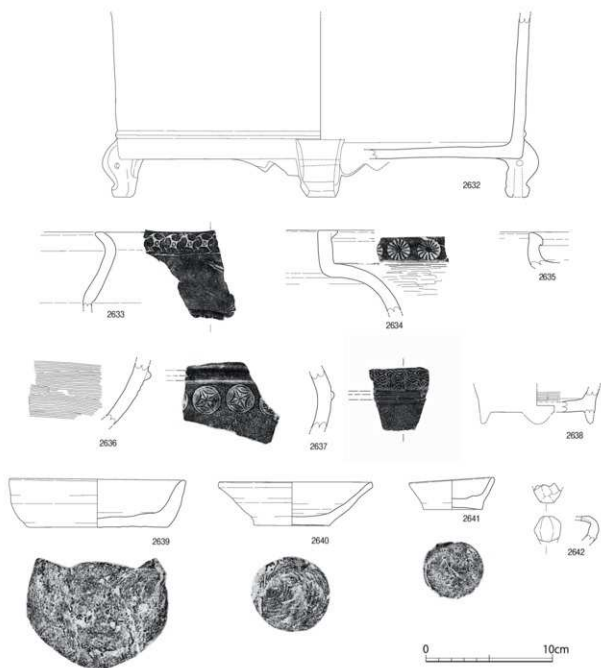
遺構の時期は、15世紀代のものを多く含むが、2626がいわゆる饅頭心の小野E群であり、これを評価すれば16世紀中頃から後葉となる。



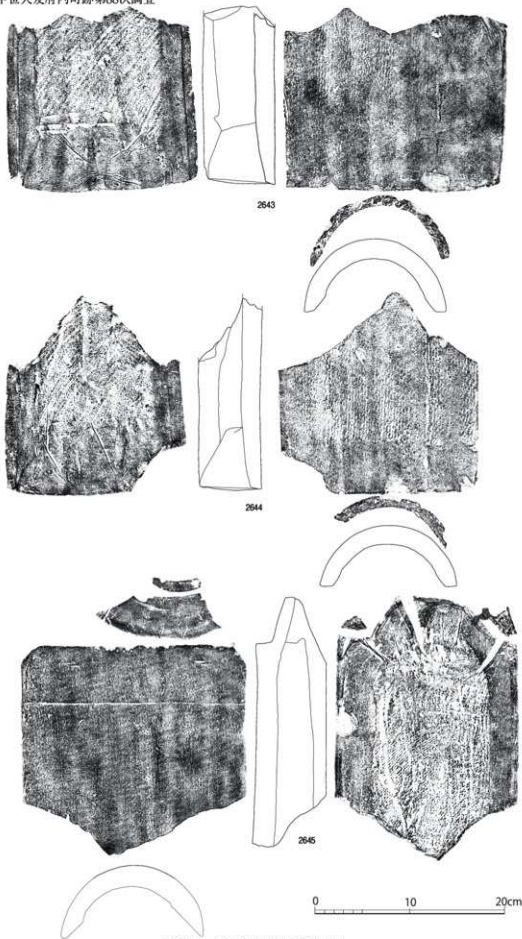
第348図 SK101 (1/40)



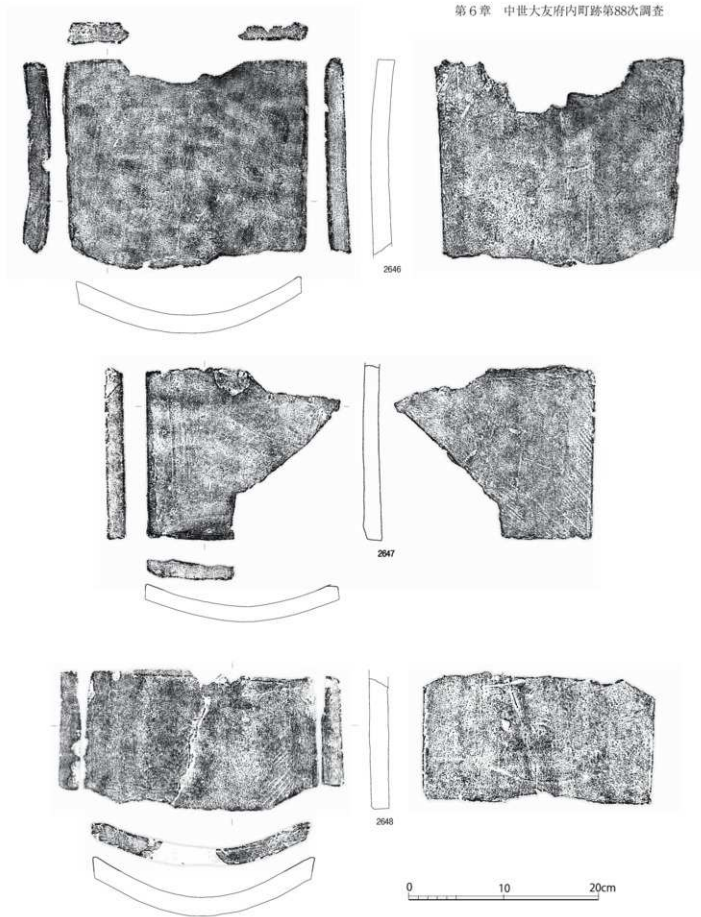
第349図 SK101出土遺物(1) (1/3)



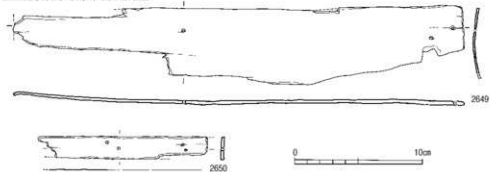
第350図 SK101出土遺物(2)(1/3)



第351図 SK101出土遺物(3)(1/4)



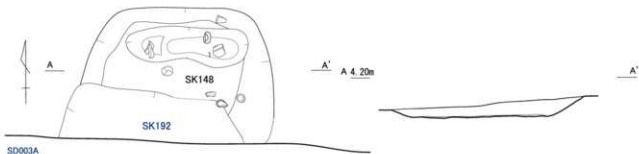
第352図 SK101出土遺物(4) (1/4)



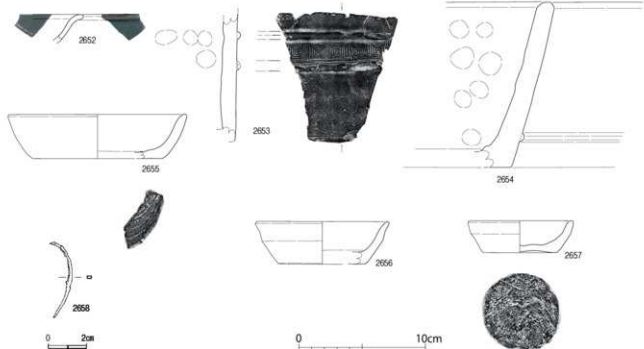
第353図 SK101出土遺物(5) (1/1, 1/3)

SK148 (第354図)

調査区北東部で検出された土坑で、SD033AとSK192に切られている。そのため全形は判らないが、東西方向は2.0m、深さは0.16mで、南北方向は1.40m残っていたが、SD033Aより南側には延びていない。



第354図 SK148(1/40)



第355図 SK148出土遺物(1/2, 1/3)

出土遺物は第355図2652から2657である。2652は青磁で、口縁部が小さく折れ玉縁状になる皿。2653と2654は瓦質土器。2653は深鉢状の火鉢の底部付近、2654も火鉢で浅く直線的に体部が開く。底部付近に突帯を有する。2655から2657は糸切り底の土師質土器。2658は銅製で、半円状を呈する。

遺構の時期は15世紀代と考えられる。

SK176 (第356図)

調査区南東角部付近で検出された浅い土坑で、SD156やSD173を切っている。非常に浅く、プランも不明瞭であったが、瓦を中心として遺物はまとまって出土している。本来はもう少し上から掘り込まれたものであった可能性が高い。

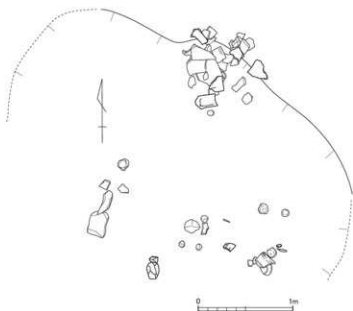
出土遺物は第357図2659から第358図2668である。2659は備前焼播鉢で乗岡編年4b期のものである。2660は口縁部が直角に内側に折れる瓦質の火鉢で、外面に菊花文がスタンプされる。2661は土師質土器で、内面に轆轤目が残る。2662は丸瓦で内面にコビキの跡が明瞭に残る。2663から2666は平瓦である。2667は石白(茶白)の下白である。2668は元祐通宝である。

SK186 (第359図)

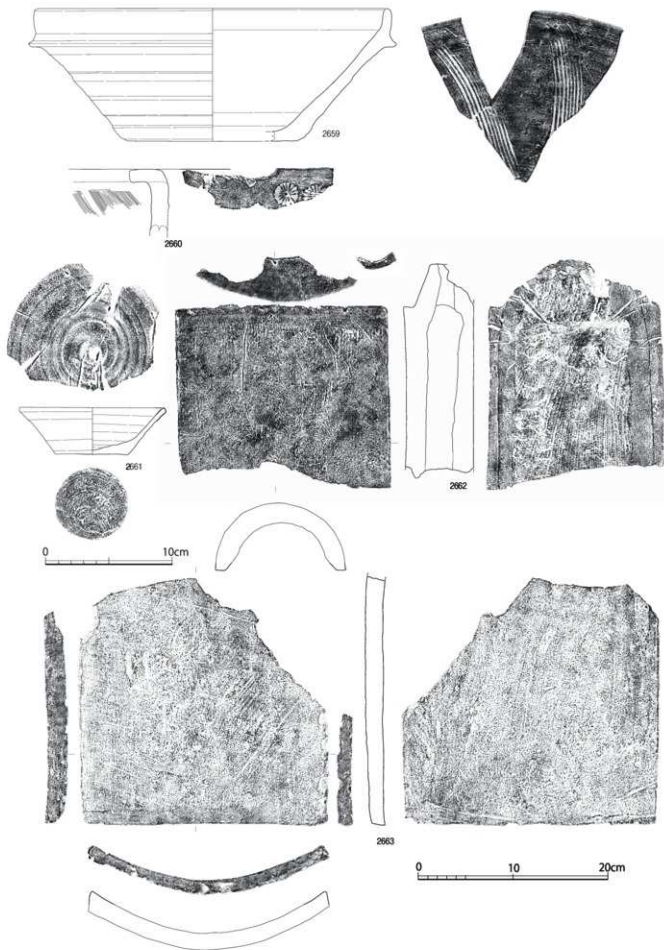
調査区東端で確認された大型の土坑である。SD185やSD173、SD156に切られており、周囲の遺構の中では最も古く位置づけられる。周囲が切られているため正確な形状や規模は判らないが、南北は2.8m、東西は2.2m程度の楕円形に復元できる。深さは0.62mである。土層断面を見ると、一度大きく掘削されていることがわかる。遺構の性格は不明である。

出土遺物は第360図2669から2679である。2669から2671は青磁である。2669は鐏縁盤で、口縁端部が肥厚し上方に揃い上げられる。内面には柳描き文が見られる。2670は小型の香炉である。2671は見込みみに印花文がある碗である。2672と2673は備前焼の播鉢で、乗岡編年中世4期のものである。2674から2676は瓦質土器で、2674は火鉢または風炉の破片、2675は浅鉢型の火鉢で、丸く内湾しながら開き、口縁端部が押しつぶされたようになるものである。外面には明瞭な菊花文がスタンプされる。このタイプの瓦質土器は、豊後地域において瓦質土器初現期の14世紀後半代に見られるものである。2676は香炉である。2677と2678は底部糸切りの小皿で、やや深めの15世紀後半葉とされるタイプである。2679は開元通宝である。

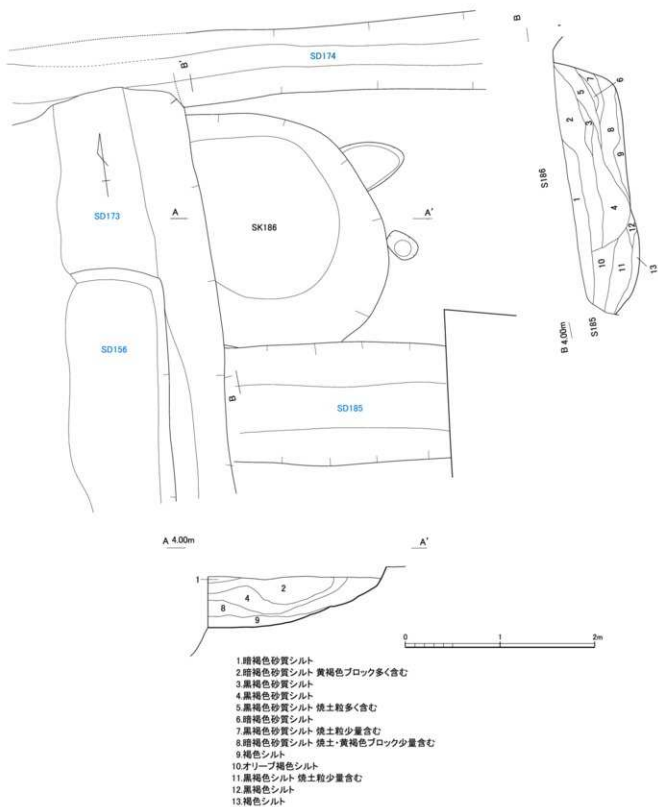
このSK186の時期は、一定程度15世紀前半代の遺物が含まれることから、15世紀後半でも中葉に近い時期に位置付けられよう。



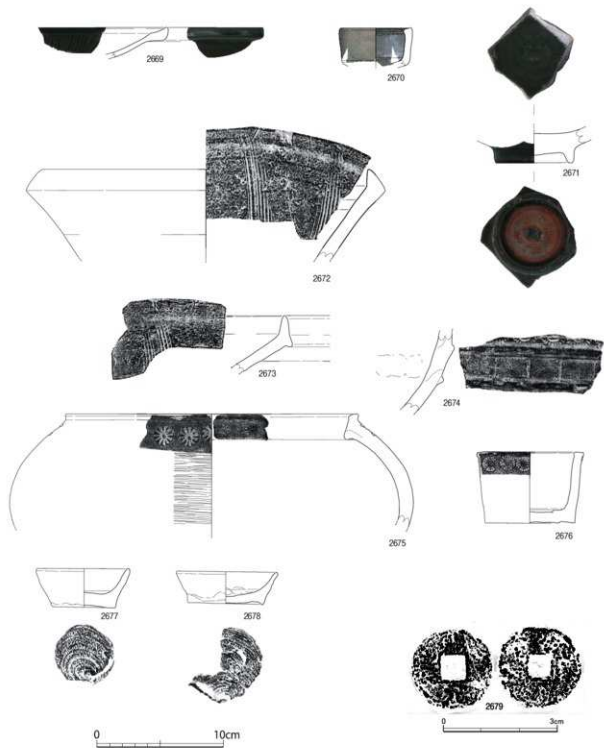
第356図 SK176(1/40)



第357図 SK176出土遺物(1) (1/3, 1/4)



第359図 SK186(1/40)



第360図 SK186出土遺物(1/1, 1/3)

SK192 (第354図)

調査区中央東寄りで確認された土坑である。SD033Aに切れられ、SK154を切っている。残っている北側部分で判断すると、略方形を呈するように角がある。北側の一辺は1.2mで、南に向かはやや広がるようになる。深さは0.25mである。

出土遺物は第361図2680の青磁である。口縁部が小さく外反する玉縁となる皿と思われる。15世紀代の龍泉窯のものであろう。



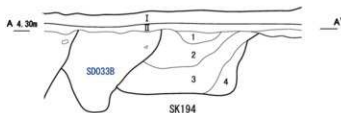
第361図 SK192出土遺物 (1/3)

SK194 (第362図)

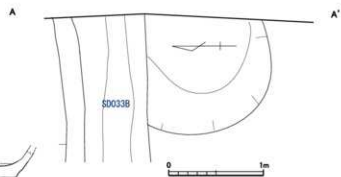
調査区東端のほぼ中央付近で確認された土坑で、北側をSD033Bに切られており、さらに東側は調査区外のため全形は不明である。復元すると、角を持たずに円形に近い形状となろう。確認されている部分で南北1.28m、東西1.28mで、深さは0.48mである。

出土遺物は第363図2681と2682である。2681は中国産の青磁碗である。2682は糸切り土師質土器の底部である。

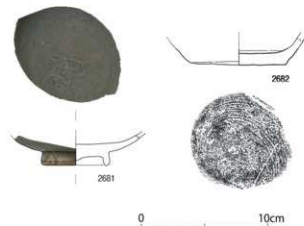
以上の遺物から遺構の時期を特定するのは難しいが、第Ⅱ段階の遺構に切られていることを考え、第Ⅲ段階とした。



- 1 10YR3/2 黒褐色 砂質シルトや中硬質粘性なし
- 2 10YR4/1 褐色 砂質シルトや中硬質粘性なし 炭化物・焼土粒少量含む
- 3 10YR5/1 褐色 砂質シルトや中硬質粘性なし 炭化物・焼土粒少量含む
- 4 10YR4/1 褐色 砂質シルトや中硬質粘性ややあり 炭化物・焼土粒少量含む



第362図 SK194 (1/40)



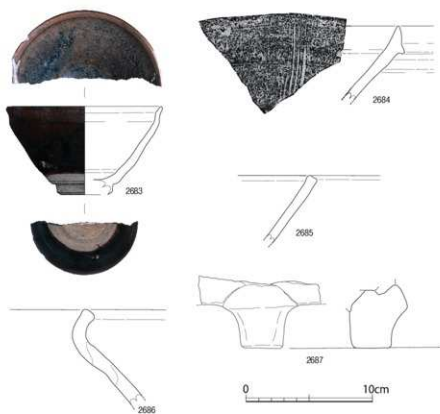
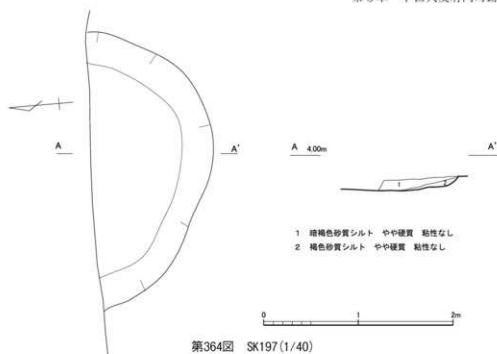
第363図 SK194出土遺物 (1/3)

SK197 (第364図)

調査区東端のほぼ中央付近で確認された土坑で、北側をSD033Bに切られているため全形は不明である。確認されている部分で東西2.92m、南北1.32mで、深さは0.20mである。

出土遺物は第365図2683から2687である。2683は瀬戸美濃系の天目茶碗、2684は備前焼の播鉢である。乗岡編年の中世4期のものである。2685から2687は瓦質土器で、2685は鉢、2686は甕、2687は深鉢の脚部である。

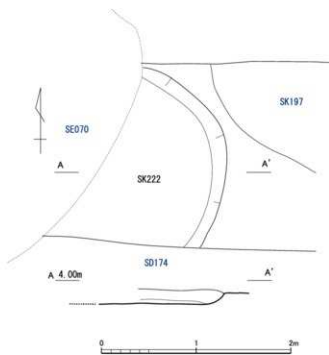
以上の遺物から遺構の時期を特定するのは難しいが、第Ⅱ段階の遺構に切られていることを考え、第Ⅲ段階とした。



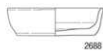
SK222 (第366図)

調査区中央やや東寄りで見出された土坑である。SD174とSE070に切られている。おそらく、残存部は全体の4分の1程度と考えられる。残存している部分は円弧を描いているので、直径2.4mほどの円形の土坑になるものと思われる。深さは0.14mである。

出土遺物は第367図2688の土師質土器のみである。底部糸切りで15世紀代のものである。



第366図 SK222(1/40)

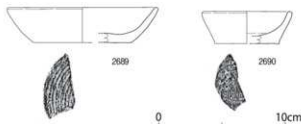


第367図 SK222出土遺物(1/3)

SK230 (第370図)

調査区中央やや南寄りで確認された、SK236と重なっている土坑である。しかし、どちらが切っていたのかについては判断できなかった。長軸1.44m、短軸1.00mの長方形を呈し、深さは0.2mほどである。

出土遺物は第368図2689から2691である。2689と2690は底部系切りの土師質土器で15世紀代と考えられる。2691は嘉祐通宝である。



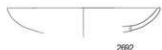
第368図 SK230出土遺物(1/1, 1/3)



SK235 (第370図)

SK230の南側で確認された土坑で、SD225に切られ、SK236を切っている。東側は大きく割られているので全形は不明であるが、南北1.84mで、東西は残存長1.40mである。深さは0.4m。

出土遺物は第369図2692の白磁の皿である。森田福年E群の皿であろう。



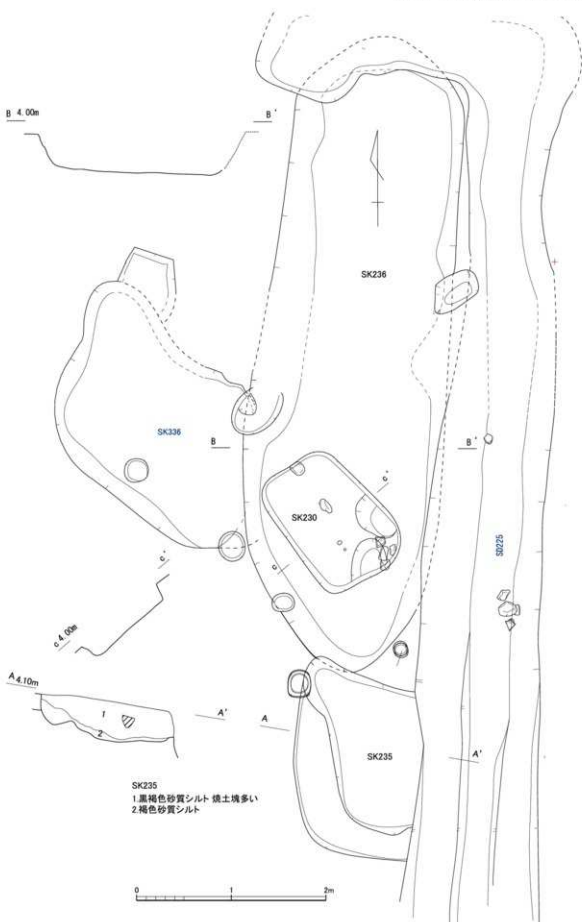
第369図 SK235出土遺物(1/3)

SK236 (第370図)

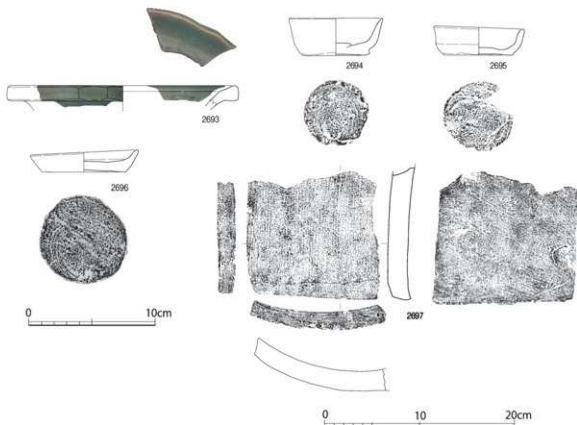
調査区のはほぼ中央付近で確認された大型の土坑である。SD185、SD225、SK235に切られており、SK336を切っている。長さは南北方向に6.68m、幅は東西方向に2.12mあり、深さは0.35mである。

出土遺物は第371図2693から2697である。2693は龍泉窯青磁の後花になる鈿緑盤。口縁部が肥厚する。2694から2696は土師質土器小皿で、14世紀代のもの(2696)と15世紀代のもの(2694、2695)がある。2697は平瓦。

以上の遺物や切り合い関係から、SK236は15世紀代に位置づけられる。



第370図 SK230, SK235, SK236(1/40)



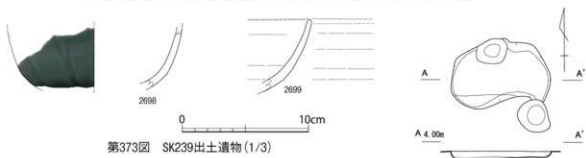
第371図 SK236出土遺物(1/3,1/4)

SK239 (第372図)

調査区の東端、やや中央から南寄りて検出された土坑で、南北0.60m、東西1.10mのやや長楕円形を呈する。

出土遺物は第373図2698の青磁碗と2699の白磁である。青磁は、片切彫りで蓮弁を描く。2699は無文の白磁碗で、いわゆる口髷げとなっている。

遺構の時期は、少ない遺物から考えると14世紀代とすることができる。



第373図 SK239出土遺物(1/3)

第372図 SK239(1/40)

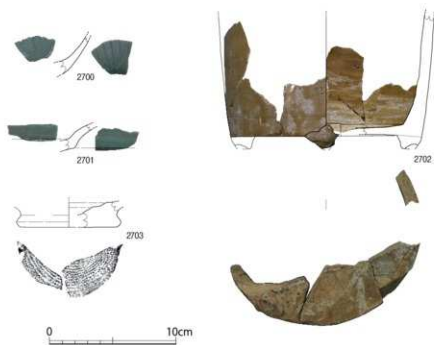
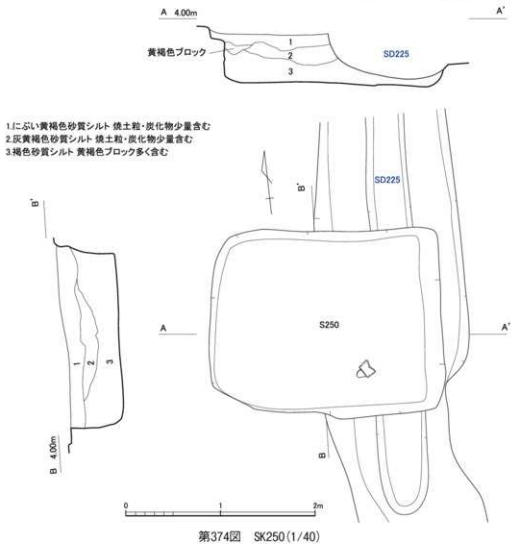
SK250 (第374図)

調査区の南部で確認された土坑で、SD225に切られている。南北2.00m、東西2.44mのやや長方形を呈し、深さは0.64mである。上面にはやや焼土や炭化物が入った土層が堆積している。

出土遺物は第375図2700から2703である。2700と2701は龍泉窯青磁で、2700は外面に線描きの蓮弁文を刻む碗、2701は腰折れの小皿である。2702は瀬戸美濃系?の深鉢である。2703は底部糸切りの燭台と考えられるものである。

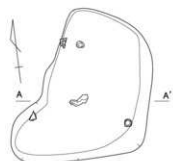
SK250の年代は、15世紀代と考えられる。

燭台



SK260 (第376図)

調査区南東角付近で確認された土坑である。SD173 (15世紀中頃) を切っている。形状は逆L字状に曲がり、二つの遺構が重なっている可能性もあるが、土層では判断できなかった。南北に1.61m、東西に1.12mあり、深さは0.20mである。

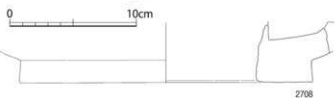


1.褐色シルト 焼土粒・炭化物少量含む

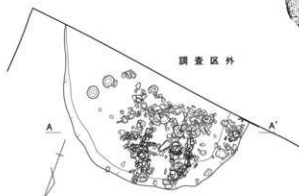
0 1m
第376図 SK260(1/40)

出土物は第377図2704から2708である。2704は見込みに刻花で花文が描かれる龍泉窯青磁碗である。外面は無文。2705は備前焼の播鉢で、乗岡編年の中世4期である。2706と2707は底部糸切りの土師皿。いずれも器高が高い。2708は白の下臼である。

SK260はSD173を切っているので15世紀中頃以後であるが、遺物から見る限り15世紀中頃に近い年代と考えられる。



0 10cm
0 10 20cm
第377図 SK260出土遺物 (1/3, 1/4)



1.黒褐色シルト 炭化物多量含む
2.暗褐色シルト

0 1 2m
第378図 SK300(1/40)

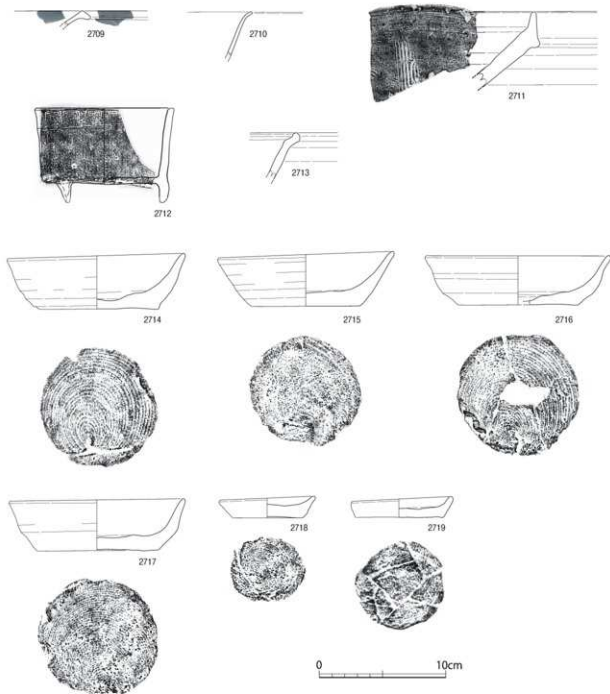
SK300 (第378図)

調査区の東端部で、一部が第95次調査区にかかる土坑である。遺構検出時からすでに多くの土師質土器が重なって出土しており、土器廃棄土坑と確認できた。第88次調査区の中では東西2.0m、南北は1.2mが確認できた。深さは8~10cmと浅かった。遺物は炭化物を多く含む土から出土している。

出土遺物は第379図2709から2719である。2709と2710は

白磁で、2709は口縁部が外側に垂れるもので、壺の口縁部と思われる。2710は口縁端部が小さく外反する碗である。2711は備前焼擂鉢で、乗岡編年の中世4b期である。2712は瓦質土器の香炉で、雷文帯をスタンプする。2713は瓦質土器の鍋で、口縁端部が小さく上方に摘まれるもの。2714から2719は土師質土器で、坏は体部の途中で屈曲する。小皿は器高が浅いものである。

SK300は、在地の土師質土器の編年観から14世紀末から15世紀前葉に位置づけられる。



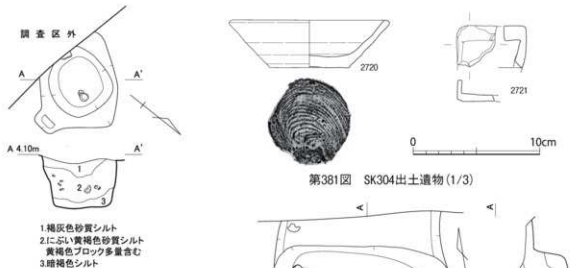
第379図 SK300出土遺物(1/3)

SK304 (第380図)

調査区の東端中央付近で確認された土坑である。調査区外に一部延びているので、現状で東西0.8m、南北1.00m、深さは0.52mである。

出土遺物は第381図2720と2721である。2720は底部糸切りの土師質土器で、口縁部は直線的に開く。2721は滑石製の硯である。

SK304の時期は土師質土器からは15世紀末から16世紀前葉と考えられる。



第381図 SK304出土遺物(1/3)

- 1.稀灰色砂質シルト
- 2.にぶい黄褐色砂質シルト
黄褐色ブロック多量含む
- 3.暗褐色シルト

0 1m

第380図 SK304(1/40)

SK305 (第382図)

調査区の東端中央付近で確認された土坑である。浅いため全形は不明であるが、東西1.92m、南北は1.00m、深さは深い所で0.68mほどである。

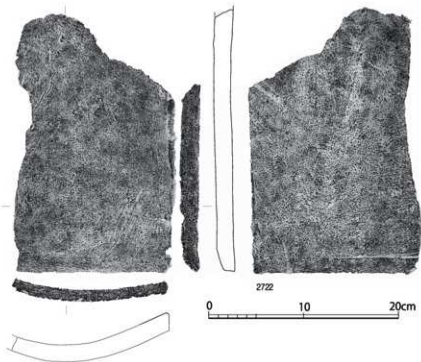
出土遺物は第383図2722の平瓦だけである。

遺構の時期は瓦だけでは決められないが、この周辺にこのⅢ段階の遺構が集中していることから、この段階に入れておく。

- 1.にぶい黄褐色砂質シルト
- 2.にぶい黄褐色砂質シルト
- 3.黒褐色砂質シルト

0 1 2m

第382図 SK305(1/40)



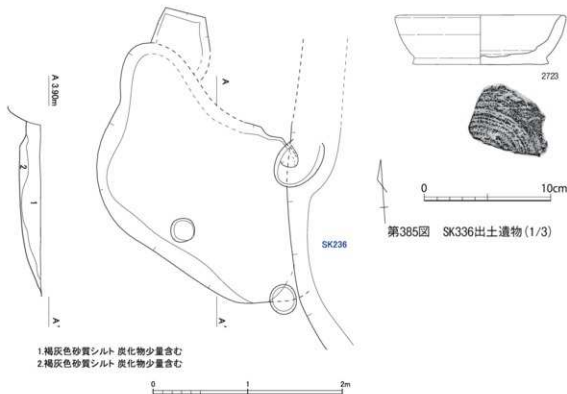
第383図 SK305出土遺物(1/4)

SK336 (第384図)

調査区中央やや南寄りで確認された土坑である。SD185 (16世紀後葉) やSK236 (15世紀) から切られている。長軸方向はSK236に削られているが、復元すると2.4m、短軸は1.7mで、深さは0.2mとなる。若干の炭化物を含む土で埋まっていた。

出土遺物は第385図2723の土師質土器だけである。

時期は、15世紀代のSK236に切られていることと、出土土器から14世紀代と考えられる。



第385図 SK336出土遺物(1/3)

1. 稀灰色砂質シルト 炭化物少量含む
2. 稀灰色砂質シルト 炭化物少量含む

第384図 SK336(1/40)

SK345 (第386図)

調査区北西部で確認された土坑である。道路遺構の下部で見つかった。東側はSD120によって切られているが、直径0.8mほどの円形になるものと思われる。遺物は第387図で、2724は直線的に体部が開く土器。2725は京都系土師器、2726は京都系土師器と思われる。

時期は、道路下で検出されたことから、16世紀後葉以前と考えられる。

SK346 (第386図)

調査区北西部で確認された土坑である。道路遺構の下部で見つかった。東側はSK345に切られる。長軸0.92m、短軸0.64m、深さ0.5mの楕円形を呈する。

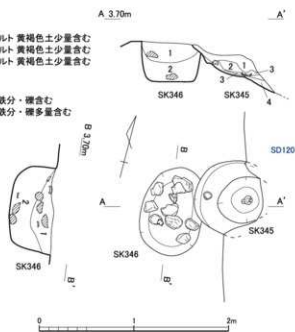
出土遺物は第388図で、京都系土師器と丸瓦である。時期は16世紀後葉以前である。

SK345

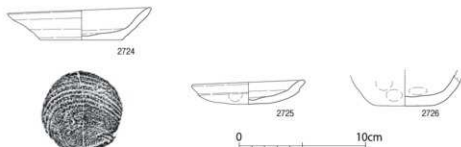
1. 稀灰色砂質シルト 黄褐色土少量含む
2. 稀灰色砂質シルト 黄褐色土少量含む
3. 稀灰色砂質シルト 黄褐色土少量含む
4. 稀灰色シルト

SK346

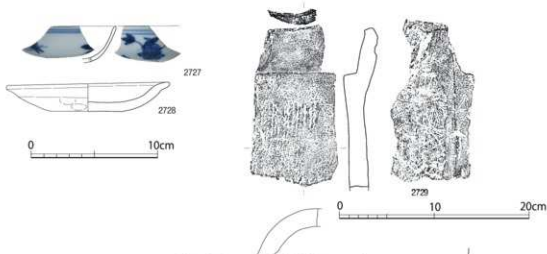
1. 稀灰色シルト 鉄分・礫含む
2. 稀灰色シルト 鉄分・礫多量含む



第386図 SK345 SK346(1/40)



第387図 SK345出土遺物(1/3)

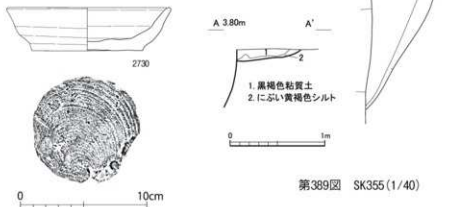


第388図 SK346出土遺物(1/3, 1/4)

SK355 (第389図)

調査区北西端で確認された土坑と思われる遺構である。第2南北街路の下面で検出された。大半はSD223によって壊されており、長さ3.08m、幅最大で0.7mの部分のみ残っていた。深さは0.2mである。

出土遺物は第390図2730の土師質土器である。底部糸切りで、口縁部は一旦内湾し、途中から外反する。遺構の時期は、2730から14世紀代と考えられる。



第389図 SK355(1/40)

第390図 SK355出土遺物(1/3)

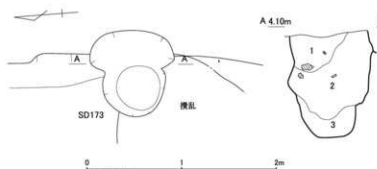
SK356 (第391図)

調査区の南端近くで確認された土坑である。しかし、大部分は電柱の埋め込み穴によって大きく壊されており、旧状は不明である。

出土遺物は第392図2731から2733である。2731は瓦質土器の浅鉢で、柱状の脚が付く。2732と2733は土師質土器である。他にも大内系土師器の小破片も出土している。

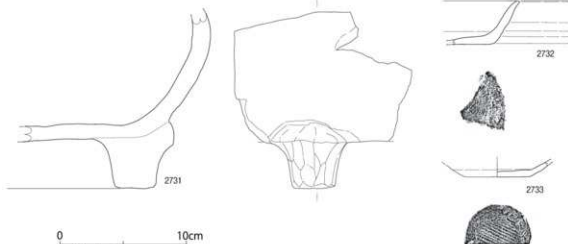
以上の遺物から、SK356は15世紀後半代と考えられる。

大内系土器



1. 褐色砂質シルト・焼土粒・礫少量含む
2. 褐色砂質シルト・焼土粒・礫少量含む
3. 褐色砂質シルト・焼土粒・礫少量含む

第391図 SK356(1/40)



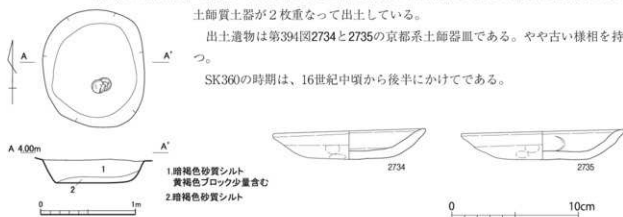
第392図 SK356出土遺物(1/3)

SK360 (第393図)

調査区の南端近くで確認された土坑である。直径1.08mのほぼ円形を呈する。深さは0.24mである。土師質土器が2枚重なって出土している。

出土遺物は第394図2734と2735の京都系土師器皿である。やや古い様相を持つ。

SK360の時期は、16世紀中頃から後半にかけてである。



第393図 SK360(1/40)

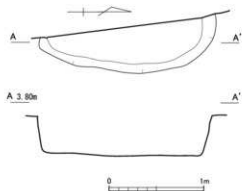
第394図 SK360出土遺物(1/3)

SK435 (第395図)

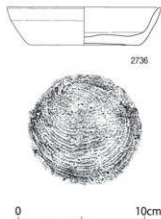
調査区の西端で、第2南北街路の下から検出された土坑である。大部分は調査区外に延びており、全形は不明である。確認できたのは、長さ1.88m、最大幅0.56mだけであり、その形状から円形になる土坑と考えられる。深さは0.35mである。

出土遺物は第396図2736である。2736は糸切り底の土師質土器で、他にも糸切り底の破片が出土している。

SK435の時期は、出土土器が糸切り底のものばかりであり、図示したものの形状から15世紀業と考えられる。



第395図 SK435 (1/40)



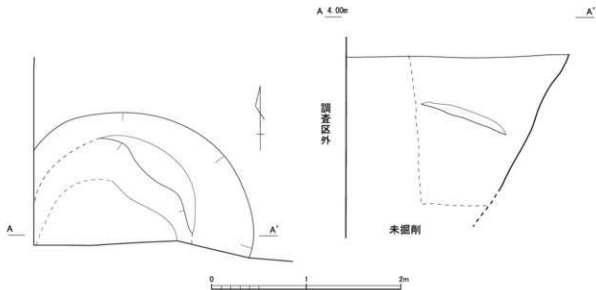
第396図 SK435出土遺物 (1/3)

SK441 (第397図)

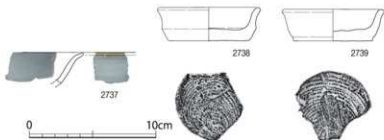
調査区の南西端で確認された土坑である。南半分は第11次調査区で調査されたSE152になる。西側は調査区外であり、全形は不明であるが、概ね直径3.0m程度の円形に復元できよう。深さは1.4mまで掘り下げたが、安全を考慮し、完掘は断念した。

出土遺物は第398図2737から2739である。2737は白磁で、腰部で緩やかに折れて開く口売げの皿である。2738と2739は同形の土師質土器である。

SK441の年代は、土師質土器の年代観から15世紀後葉をあてておく。



第397図 SK441 (1/40)



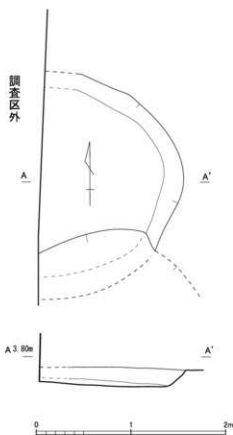
第398図 SK441出土遺物 (1/3)

SK442 (第399図)

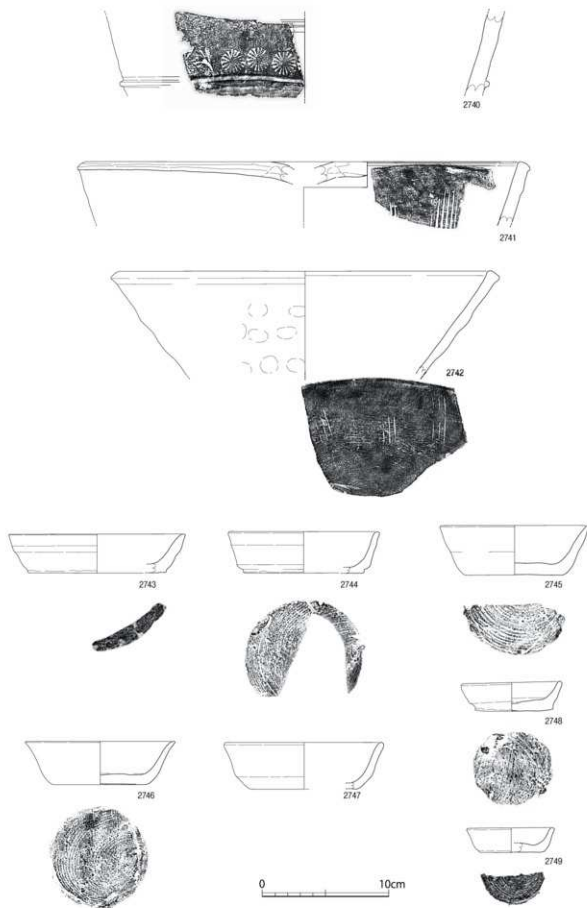
調査区の南西端で確認された土坑で、SK441に切られている。また、西側は調査区外に延びており、全形は不明である。しかし、概ね直径2.4mほどの円形に復元できよう。深さは0.20m確認している。

出土遺物は第400図2740から2749である。2740から2742は瓦質土器で、2740は突帯と菊花のスタンプ文がある深鉢、2741と2742は播鉢である。2743から2749は土師質土器で、坏は口縁部の途中で一度折れて大きく開く。

SK442は、出土遺物から14世紀中頃か後葉と考えられる。



第399図 SK442(1/40)



第400図 SK442出土遺物(1/3)